第 44 回　日本ジオパーク委員会 第一部 議事録

日時：2021 年 12 月 22 日(水) 10:00～16:00
場所：日本ジオパークネットワーク事務所（Zoom によるオンライン開催）

＜委員長＞
　　中田　節也　　東京大学名誉教授・防災科学技術研究所 火山研究推進センター長
＜副委員長＞
　　宮原　育子　　宮城大学名誉教授・宮城学院女子大学現代ビジネス学部 教授
＜委員＞五十音順
　　大野　希一　　鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会 主任研究員
　　久保　純子　　早稲田大学教育学部 教授
　欠　　黒田　乃生　　筑波大学芸術系 教授
　欠　　齋藤　文紀　　島根大学研究・学術情報機構 エスチュアリー研究センター長・教授
　　柴尾　智子　　元公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ＡＣＣＵ）
　　菅原　久誠　　群馬県立自然史博物館 副主幹（学芸員）
　　田中　裕一郎　産業技術総合研究所 地質調査総合センター
　　新名　阿津子　東北公益文科大学 公益学部 准教授
　　橋詰　潤　　新潟県立歴史博物館 主任研究員
　　長谷川　修一　香川大学名誉教授 四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構副機構長
　　／危機管理先端教育研究センター長
　　ヴォウォシェン・ヤゴダ　一般社団法人隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会 国際交流員
　　山口　勝　　日本放送協会 横浜放送局チーフアナウンサー
　　渡辺　綱男　　自然環境研究センター 上級研究員
　　渡辺　真人　　産業技術総合研究所 地質情報研究部門・GGN 執行委員会委員
<日本ユネスコ国内委員会事務局＞
　　原　文絵　　文部科学省 国際統括官付 国際統括官補佐
　　岡本　彩　　文部科学省 国際統括官付 ユネスコ第三係長
　　川﨑　美海　　文部科学省 国際統括官付 ユネスコ第三係員
＜関係省庁（オブザーバー）＞　建制順
　　沼　美紗　　内閣府 地方創生推進室 参事官補佐（内閣府 地方創生推進事務局）
　　末永　珠佑　　内閣府 地方創生推進室 主査
　　（内閣府官房 デジタル田園都市国家構想実現会議事務局）
　　柴田　伊廣　　文化庁 文化財第二課 文部科学技官
　　山路　広昭　　国土交通省 水管理・国土保全局 砂防部砂防計画課 地震・火山砂防室 課長補佐
　　岩井　雅代　　観光庁 観光地域振興部観光資源課 新コンテンツ開発推進室 専門官
　　尾﨑　絵美　　環境省 自然環境局 国立公園課 国立公園利用推進室 室長補佐
　　萩野　周　　環境省 自然環境局 国立公園課 国立公園利用推進室 エコツーリズム推進専門官
＜事務局＞
　　斉藤　清一　　JGN 事務局長

古澤　加奈　　JGN 事務局次長
宮﨑　博子　　JGN 事務局員
甲　健太　　JGN 事務局員
関村　絢　　JGN 事務局員

【開会・委員長あいさつ】

委員長：コロナの第 6 波もよりも寒波の方が先に来ている。皆さん雪は大丈夫か。今日から 1 月末まで 3 回に分けてユネスコ世界ジオパーク 2 地域のアドバイスミッションの意見交換と、13 か所の審査がある。長丁場だが今日はよろしくお願いする。

世界情勢としては先週、14 日から 16 日にかけて第 9 回ユネスコ世界ジオパークの国際会議が開催された。済州島を基地局としたわけだが、委員の中でも何名かの方は参加しているので概要はお分かりだと思う。HP に今後色々出ると思うので、それを見ていただきたい。

この会議に先立って、8 日から 11 日にユネスコ世界ジオパークカウンシルミーティングが行われた。この委員会からは委員 1 名と事務局 1 名に参加いただいた。それもすでにメーリングリストで概略が紹介されているので省略するが、もし何かコメントがあれば後程いただきたいと思う。

今回の会議で一番印象的だったのは、ユースフォーラムが開催されたことだと思う。世界中の国々から代表者が出て、しかも 23 歳以下という縛りの中で意見交換がされた。フォーラムの Chair と Vice Chair が東南アジアから選出されて、特に代表がインドネシアのトバカルデラの若い人で、非常に熱い挨拶をしていた。いずれにしてもヨーロッパではなくアジアから 3 人の代表が選ばれたということは、全体の動きが若いほうに、それから東南アジアにきているという強い印象を受けた。日本からも 2 名の方に参加いただいたが、色んなところで積極的に発言いただいた。日本でも若い人が積極的にジオパークに参加できるような仕組みを今後作っていかなければならないと思う。色んな国際会議で日本の可視性が弱いと思うので、若い人達にどんどん頑張ってもらえるような仕組みを日本として作っていく必要があると思っている。

済州島の会議においては、GGN（世界ジオパークネットワーク）の総会を兼ねているわけで、そこでは古澤さんが新しい Executive Board Member として選ばれた。これまでは渡辺真人さんだったが、入れ替わりという形で日本への情報共有が上手くいくように今後も続くと思う。

前委員長の尾池和夫先生が GGN としては 8 人目の Honorary Member に選ばれた。これも日本の活動が世界的に認められてきている証だろうと思う。

世界の審査はヨーロッパ、最近はラテンアメリカで展開されていて、50 ヵ所以上実施されてきている。一人で 5 ヵ所も審査をした人もいたようだ。残念ながらアジアについてはまだ審査が実施されていない。これは各国の空港検疫措置に依存しているわけだが、それが解消され次第、夏のシーズンを待たずに一斉に始まると思われる。それに備えていつでも審査に迎えられるようにしておく必要があると思う。

本日は非常に長丁場になると思うが、どうかよろしくお願いする。

【報告事項】

委員長：報告事項として一つだけ、白滝のアクションプランについて報告しなければならない事があるので、3 分程度で調査を担当した委員に報告してもらおうと思う。アクションプランというのは毎回通知書に基づいて、地域から半年以内を目処に出されるもの。今回、白滝から出されたものについては少し問題があったので、これを調査していただいた。概要等を含めて短めにお願いする。

委員：今、委員長から説明があった通り、アクションプランが遅れて提出されたわけだが、その内容も JGN 事務局と私の方でも確認させていただいて、内容的には皆さんに共有できない、アクションプランとして成り

立たない様な形だったので、12 月 19 日、20 日に JGN 事務局長と一緒に白滝へ行って説明すると共に、意見共有をしてきた。

問題点としては、プレスリリースで予算の計上した数字そのものが人件費を含めていないような形で、町の負担をちゃんと把握できていなかったという事もあって、やはり町の人達がこれは何なんだ？というような事になったのが一つ。ジオパークを推進していく意味はあるのかというようなところまで発展してしまった。

それとは別にイエローカードになった一番の問題点が、白滝ジオパークの事務局がステークホルダーと共にジオパークを推進していくという体制ができていない。ただし、その団体や人、ステークホルダーに関しては十分に揃っているので、現状できることをしっかりと考えて意見を共有して進めて、体制を立て直していただきたいという形で審査結果がイエローになったというのは私、調査員の理解しているところ。

実際は意見交換会という事で、各団体やステークホルダーを集めて、町長（会長）も出席のもと 20 日の午前中に行われた。2 時間だけだったが、JGN 事務局長と私のほうから現在の審査結果報告書に関する真意みたいなところをしっかりとお伝えして、その場ではステークホルダーとの繋がりをその 2 時間の間に作って、みんなで意見を出し合っていこうというような空気作り、関係作りを達成目標として会議を行った。なので、事務局から原案としてアクションプランの書き直しがでたが、基本的には事務局だけで作っているような状況なので、そうではなくてそれは見てもらって、もっとステークホルダーの人達も一緒にやっていこうというような形で意見交換を終了したという結果になっている。町長も少し誤解をしていたジオパークの推進に関わるところ、教育に偏重しているところもあったので、実際に成果を出していこうという形で最終的にはまとまったと思う。

補足があればお願いする。

事務局：委員の説明で現地は理解をよく深めたと思う。また、そうは言いながらこの後が大事なので、この後の会議にオンラインでも委員が参加してくださるということも言ってくださったので、この後を注視していきたいと思う。

委員長：重要なイエローを出したところへのフォローアップをきちんとしていただいているということだと思う。引き続きよろしくお願いする。

【議題① 再認定審査地域審査：磐梯山】

委員長：それでは議題①に入る。最初の議題として磐梯山の再認定審査地域報告。報告者はお願いする。

副委員長：それでは磐梯山の再認定調査の結果についてお話しさせていただく。11 月 3 日から 3 名で伺った。磐梯山に関しては 2019 年に条件付き再認定ということになったので、2 年おいての今年に再認定の調査になった。

今回の評価結果としては、グリーンということでお話しさせていただく。前回の 2019 年の時には、課題として大きく 6 つあったが、保全の計画、管理計画が出来ていなかったということで、基本計画、保全計画の策定をして下さいということ、それからサイトのリスト整理等々と、関係者の共有ということが言われていた。一番大きな問題としては、事務局の運営体制ということで、専門員お一人の姿しか見えないような中での活動をしていたと思われる。また、施設整備のこと、それからあともう少しジオパークのストーリーの中で地域の暮らしをどうやって組み込んでいくかも課題となっていた。

2 年後の今回お伺いして、主な評価点の箇所でも書いたが、前回の審査で指摘された事項については、ジオパークの関係者で課題を共有して解決に向けた対応を行っている。

一番大きなことは、3 つの構成自治体、猪苗代町、磐梯町、北塩原村これらの自治体の方達全てが今回の課題を共有しながらこの 2 年間でそれぞれ一緒になって活動してきたことがよく分かった。ジオパークの基

本計画、保全計画も策定されているし、サイトの保全に関してはカルテをしっかりと作成をして、事務局や専門員だけではなくて、ジオガイドさんとそのカルテを共有しながら多様な方達と参加型のモニタリングを行っているということも分かった。

事務局体制に関しては、北塩原村にある合同庁舎に事務局が移転し独立したオフィスを持って、そこに構成自治体から出向している担当者や地域おこし協力隊、会計年度任用職員の方達が一緒になって運営体制が構築されている。懸案だった運営委員長の処遇の改善も行われているとのこと。

拠点施設の整備は進行中だが、環境省との連携も非常に良くて話し合いができているということ、それから可視性に関してもJR猪苗代駅、道の駅、地元のショッピングセンター等、様々な施設で案内板や動画の映写、ポスターの掲示が積極的にされていたことを確認した。

ジオパークの活動については、3つの構成自治体の中の町づくり団体、自然保護団体、農業者の方達と新しい主体の人達との連携をしながら活動を進められていることを確認した。そういう意味では、前回ほとんど人の姿が見えなかったが、今回はジオパークの中で皆さんがたくさんの人達と活動を進めている、特に若い方達の活動が非常に活発に進められていることがよく分かった。

今後課題としていくつか出ているのは、基本計画のほうは出来てはいるがロードマップが出来ていなかったので、具体的にいつまでに何を誰がやるかといったようなところを具体化してほしい。あと、拠点施設を環境省と協議しているが、今後ジオパークの理念や活動が伝わるような展示やデザインの工夫をお願いしたい。

また、今回非常に進んだ運営体制の改革だが、ここで地域おこし協力隊や有期任用のスタッフが非常に積極的に有効に動いているので、こういった流れを継続的に保持していく仕組みが必要ではないかということを指摘してある。

気候変動に関する課題もジオパークの中であまり伝わっていなかったので、そこも指摘した。

大きなところとしては観光に関しても今コロナで動いてはないが、そういう部分を今準備してほしいということもお話しした。ジオパークのパンフレット等で、境界線が明示されていないものが多いので、そういう部分の整備や、自治体が過去に整備した複数の看板等の整理をしていただきたいというようなことを指摘事項として出した。

冒頭に申した通り、今回大きく改善されていたので、今回の評価結果はグリーンとさせていただきたいと思う。

委員：総じて言えば、前回に条件付き再認定という評価を受けて、この2年間磐梯山では大きな前進が見られたというのが現地を訪れた3人の共通した評価となった。

国立公園内と国立公園外があるわけだが、国立公園外を含めた保全計画がしっかりできている。国立公園内の裏磐梯地区で築かれてきた官民共同のモニタリングシステムがあるが、それを参加型のモニタリングで山地全体のジオパークエリア全体に広げる体制ができたというところも大きいと思う。この2年間に3つの町村が持続可能な地域作り、観光や農業であったり、自然再生だったり、町作りであったり、そういう事業がこの2年間で動いた。それに積極的にジオパーク事務局が働きかけをして、そう言った様々なセクターの人達と新しい繋がりを作っていって、その人達がジオパーク活動に関わる新しいパートナーが拡充されていった。そういう今後の展開に繋がるような動きもあったように見えた。

委員長：只今の報告に対して質問やコメントはあるか。挙手でお願いする。

私からだが、運営委員長の処遇はどのような課題になっていたのか。ボランタリーで位置付けされていないことだったのか。

副委員長：ボランタリーで非常に安い予算で働いていたということで、その部分は大きく変わってはいないが、基本的には研究費というような形で指導していただいている分に関する費用保障みたいな部分をされてき

ているということになっている。
委員長：承知した。どなたか質問はあるか。
事務局：拠点施設だが、今回、裏磐梯ビジターセンターの今後の展示改修の中でしっかりと連携を進められそうということだが、拠点施設として位置付けられているのかということと、道の駅等の連携と今後の発展についてお話しを聞きたい。
委員：環境省の裏磐梯のビジターセンターは今後1、2年の間に大規模な展示の改修計画が立てられており、ちょうどその改修計画の中でジオパークの観点を組み込んでいこうということで合意がされている。具体的にどういう形で組み込んでいくかというところをジオパークと環境省の間で、今、鋭意協議を重ねている状況。展示の中身だけじゃなくて、国立公園の利用プログラムとジオパークの活動との連携を深めていけることを目指していけるような話し合いが行われている状況。
副委員長：道の駅等につきましては、今の磐梯町のほうで非常に大きな拠点施設を兼ねている道の駅が出来ており、利用客が非常に多い所で、そこの情報コーナーに国土交通省の道路情報と共にジオパークの大きなマップや、映像を映せるようなコーナーがしっかり設けられていた。また、磐梯町の地元のショッピングセンターの中の地元の方が休憩するスペースには非常に大きな画面があり、そこに磐梯山ジオパークの様々な映像を映すことが出来るようになっている。これも実際に行った時だけではなく毎回流してもらえると思うが、こういった形で周知を図り、情報の拠点として使っているというところを見てきた。
委員長：他には質問はあるか。
事務局：評価点のところにある農業者との連携で、ジオファーマーズは課題ではなく、むしろ全国的にも先進的な取り組みをしているのかと思うので、もう少し何か補足してお話ししていただければ。
副委員長：私もその取り組みは本当に素晴らしいと思っており、日本農業新聞にも触れさせていただいたが、今磐梯町の農家の二代目の若い人達が中心となって専門員の方達と対話をして、大地と自分達との農業の関わりということに非常に大きく目覚めて、自ら磐梯山の大地の恵みを受けて様々な作物を作っている農業者としてジオファーマーズというグループを立ち上げて、野菜農家だけではなく酪農者の方達など8人程の若い人達がブランド化を進めながら、磐梯山麓の農業産品を売り出していこうということを始めている。若い人達の層が新しいジオパークの見方、自分達の暮らしとジオパークが結びついているということを体現してくれている活動だと思っているので非常に楽しみに思っている。
委員長：特に質問がなければ磐梯山ジオパークに関しては再認定ということでよろしいか。
一同：(拍手)
委員長：磐梯山を再認定とする。

【議題② 再認定審査地域審査：下仁田】
委員長：次は議題②で再認定審査の下仁田。それではまず報告をお願いする。
委員：下仁田は地質が少し難しい所で、中央構造線、付加体、変成岩があり、クリッペという逆転した所があり新第三紀のカルデラ構造や火山がある所。地形は鏑川という川が流れていて段丘地形があり、世界遺産の荒船風穴というものがある。
　前回 2017 年に指摘されたのはパートナーシップについて協定書というものがないということだった。可視性については前回いくつか指摘されていた。ジオパークのことが書かれていないことや、外国語対応のことなど。ストーリーやテーマが難しくて分かりにくいという指摘も前回にあった。地質遺産以外の生態系や文化などの関わり、コンニャクとネギがよく出てくるのでそれらとの関わりが指摘されていたと思う。また、拠点施設として下仁田町自然史館があるが、自然学校がやっている施設になる。それらが指摘されていた。それから、教育活動における持続可能な開発というところも前回の指摘事項だった。

それに対して今回は結論を言うとグリーンでよろしいという結論になった。現地調査は 11 月 5 日から 7 日に 2 名で行った。

前回の指摘事項に関して、テーマとストーリーが難しいというところでは 3 つの柱を立てて「海から陸への大変動の生き証人」、「太平洋と日本海を分けた古い火山」、「東西の文化とモノの交差点」というテーマが再構成された。専門家とガイドさんの協働というところで改善が見られた。

部会というものがいくつかあるが、皆さんとても頑張って活動していて、これもボトムアップでやっていることが良好に機能しているというのが見られた。ガイドさんも頑張っており、専門家との連携も進んでいて、ガイドの時に難しいところは自分で簡単な模型を作って見せたり、枕状溶岩がぷにゅっと出てくる模型などを作ったりして工夫をしていた。

新しいジオツアーということで、河岸段丘の所でネギ畑を見ながら歩くツアーが開発されていた。面白い良いジオツアーが出来ていた。

以前は観光協会との連携があまり良くなかったらしいが、今回は観光協会ととても良く連携がとれていたと思う。道の駅に観光協会の観光案内所がありそこの職員の方も公認ジオガイドになっている。「ジオパークはどこですか?」などの質問にもきちんと答えていた。

教育活動に関しては教育部会がとても良くやっており、組織としてちゃんと対応している様子が分かった。

改善を求める事項としてはパートナーシップのところで、お互いに肯定はしているけどきちんと文書の交換、協定書などが出来ていないということだった。また、ストーリー、テーマを再編していたが、それに合わせた看板や説明、展示の反映が遅れている。

拠点施設に下仁田町自然史館というのがあるが、かなりマニアックな展示が多くて、いきなり来た方や子供たちにぱっと分かるようなガイダンスが足りないのではないかということだった。

生態系や無形文化遺産に関しては、荒船風穴というのは世界文化遺産だが、それ自体がジオサイトになっているので、その周りの生態系なども含めて協力体制をさらに進めて欲しい。

弱い分野で観光分野とマーケティングで少し足りないところがある。そして現時点で女性の非常勤職員はいるが正規職員がいないところである。

道の駅で鉱物をお土産で売っていることが課題。あと全体の保全関係の策定がまだである。ジオツーリズムによる経済への波及をマーケティング調査できちんと出して欲しいというようなのをあげた。

オブザーバー（調査員）：重なるところもあるかもしれないが、今から 4 年前の再審査の時にはこの直前に部会という制度ができて何とかまわっている状態だったが、その時の評価としてはボトムアップで運営されているというところだったが、この 4 年間でこれがちゃんとまわるようになったという事がすごくポジティブに見られるところだった。HP 上にどのような部会が行われているかという情報が出ていないので分かりにくかったが、実際現地に行って確認すると、部会という正式な会議体ではないけれども、横串を入れていくような打ち合わせが存在していたりとか、議事録はとってはいないけれども、1 ヵ月に 1 回程度関係者が集まって検討する会議が設けられていたり、かなり関係者の距離が縮まったという印象を受けた。それを受けてテーマの改善や、ガイドツアーの中で専門的にも間違ってない上により分かりやすい実験ツールを使った解説が行われるようになったりなど、専門家とガイドさんの距離が近づいたことで様々な良い出来事が起きている事が確認できた。

もう一つ近付いてきたと感じるのが観光協会で、かなり属人的な問題だったようだが、観光協会があまりジオパークに協力的ではなかった状態がこれまで続いていたのが、観光協会側の体制が変わったことで距離感が近づいた。今の観光協会の事務局長の方が、マーケティング調査に基づいた観光事業というのをより推進して行きたいという考えを持っておりそういった取り組みがまさに始まったところ。道の駅下仁田に観光協会が入っているが、コロナ禍でも 60 万人の観光客が来ていて、この観光客をいかにジオツアーに興味を

持たせるかというのがここのジオパークにとって極めて重要。そのため道の駅発着のジオツアーを成立させることが重要だという事を観光協会が考えられていて、それで段丘とネギを巡るツアーが開発されたと聞いた。まだ始まったばかりだが、戦略的にツアーを開発していくという仕組みが出来つつあるということもあり、出来ればそういったところをもっと拡大していただきたいというところが課題になっている。

ジオパークの教育についても、これまでは下仁田自然学校の専門家や先生たちをそれぞれ個別に呼んでやっていたという状態だったが、地元にはコミュニティを作る事業や、理科の課題研究などの小中高あるいは生涯学習に関係するような関係者が一緒の共同体みたいなのを作り、そこで全体をコーディネートしていく形がとられている。これは前回の４年前の再審査にはなかった。このために例えばジオパーク学習だったり、高校での課題研究だったりというのが関連して行っていくことが出来るようになった。この構成されているチームというのが、下仁田ジオパーク協議会の教育部会のメンバーでもある。それらが連携されているのがユニークな点。

一方でどうしても難しい問題を難しいままに観光客に伝えていて、ややもするとジオパークというのはマニアのために存在するのではないかという誤解を与える可能性もある。ここは早めに改善する必要があるというところを指摘した。

委員長：ただいまの報告に対して質問等があればお願いする。

委員：前回、条件付き再認定でその刺激で動き出したという感じだったので、条件付きの条件が取れてほっとして休んでしまうのではないかと心配はしていたが、色々前に進んでいるという話しを聞いてほっとしている。

下仁田自然史館は昔から難しいみたいだが、相変わらず難しい。担当者は変わっていないのか。

委員：同じ。

オブザーバー（調査員）：メンバーは変わっていない。

ただ、難しくなっている原因は分かった。博物館だが、学芸員一人と館長さんが通いで来ている状態なので、正直、博物館の業務としては相当マンパワー不足。なので、展示に関しては下仁田自然学校に委託している。下仁田自然学校の展示がそこでされているという実態に関しては変わっていない状況。ただ、そこは有料ゾーンの所なので、入ってすぐの無料ゾーンの所や、観光協会のほうで簡単な展示をするようなスペースを作るのは可能だということを伺っていたので　道の駅のほうで作るなど、割と簡単なものを作ることはおそらく出来るのだろうと思う。ただ、よりお金を払ってやるところに関しては今後のさらなるテコ入れをすることになると思う。

委員：展示に関しては詳しい委員からコメントをいただければ良いのかと。

委員：バッググラウンドとしては、群大の名誉教授の方が、環境省の植物の仕事等をしている有名な地元の名士の先生の方々と立ち上げた自然史館だが、内容は地質館みたいな感じになっていたというのがそのままになっている。地質に偏った展示が今でも行われているので、それをどういうふうにジオパーク的な見せ方に変化していくのかというのは、おそらく自然学校に対するジオパークの考え方の普及や相互理解があってこそだと思う。

もう一つは、展示や会議に参加する関係者の消耗品や交通費などの必要経費でかなり足が出てしまっている状況。そこは事務局がしっかり下仁田のために、ジオパークのために動いている人には最低限の交通費を出すとか、そういうサポートは絶対必要になってくるので、そこはしっかりしていかないとそのうちバラバラになってしまう可能性がある。なので、展示の内容が難しいなど調査員がおっしゃったように、お金をかけるような変え方はなかなか難しいので、まずは人の意識をちゃんと変容させる、ジオパークってこんなものなのだよというのを自然学校にも共有しながら良い展示につなげていくというのが現実的だと思う。

委員長：財政的にはどうなのか。下仁田は安定しているのか。細々とやっている感じなのか。

オブザーバー（調査員）：財政的にはそんな多くはないが、予算の大半は人件費を除くと博物館の修繕や維持管理費になっている。光熱、水道管理費が一番大きくて、その次に研究助成、あとそれに関係するような報告書の作成だなど。あと看板類の補修作業が大きな費用になっているが、実際看板等はここ最近そんなに更新されていない状態が続いており、予算的に十分かと言われると十分には見えない。

委員長：予算で出来ないところを色々対応してちゃんと解決していくというところか。

事務局：自然史館は 2021 年の 4 月に博物館登録されたということで報告されているが、これによって何か見込まれる変化はあるのか。

オブザーバー（調査員）：確認をしたが、私はそれによる効果があまり分からなかった。

委員：改善を求める点の 6 番目に「道の駅での鉱物販売」と書かれているが、これは看過できる範囲なのか。リコメンドして改善がある程度求められるレベルなのかどうかというところを確認したい。

オブザーバー（調査員）：これはいわゆる天然石販売。道の駅のいくつかの区画に販売コーナーがあてがわれていて、その中に天然石の販売コーナーがあるという感じ。事務局はなるべくそれを別の販売形態に変えて欲しいとここ最近お願いしているが、なかなか改善されていないというのが今のところの実状。

委員：一応事務局は何とかしてくれという働きがけは継続的にしているということで良いか。

オブザーバー（調査員）：はい、それは継続的に行っている。

委員：承知した。それでは今後もその働きがけを続けてくださいという話しになるのか。

オブザーバー（調査員）：はい、そのような意識でいる。

委員：承知した。

委員長：先程の財政のところを見ると、結局拠点施設維持が大半。要するに博物館の経費もジオパークの経費で見ているということか。

オブザーバー（調査員）：博物館業務は彼らにとって博物館業務イコールジオパーク業務になっている。

委員長：運営費はほとんどジオパークの経費で出されているのか。

オブザーバー（調査員）：とも言える。我々の視点から見るとそう見えるが、向こうから見ると博物館の業務はジオパークの業務だという言い方になると思う。

委員：歴史館と自然史館の 2 つが町内にある。

委員長：自然史館のほうが要するにジオパークの拠点施設で、その経費をジオパークとして見ているという感じ。これは苦しそう。

　他に質問はあるか。

委員：あと一つ良い事の追加をしたい。神津牧場があるが、ここが公益財団法人でエコツアーみたいなことのアイディアを持っているが、まだマンパワーがないという感じなので、いわゆる生態系との連携みたいなところで有望かなと思った。

　また、町の中の変成岩の上でロックコンサートというのをやっていて、それを町の人がみんなで協力してやっているみたいで、若い人が楽しむ企画があるとのこと。

委員：2 点質問をしたい。まず 1 点目が農産物に関して土壌学なようなことを入れてと言われていて、そこら辺は反映されているようになってきたのか。

　もう 1 点、歴史館と自然館で、自然館のほうの館長さんが連携した企画展をやったり等、個人的な努力もあると思うが、荒船風穴とかそういった展示はあると思うが、ジオパークと世界遺産が重複した地域の資産というのが分かるような感じできちんと連携されているのかというのが不安点というか疑問であるのだが、どうだろうか。

委員：まず土壌のほうだが、関東ローム層の展示が自然史館にはあるが、今回新しく段丘の上を歩くネギツアーというのがあって、ネギとコンニャクという下仁田の代名詞があるが、それを歩きながら話しが聞けると

いう事で、それは一歩前進かなと思っている。コンニャクは実は、コンニャクの生産自体はもうやっていなくて、赤城山麓で生産したものを持ってきて粉を作ってコンニャク生産をやっているという状況。ネギは、通年で小さいものなど色んな育ったものが見られる。

荒船風穴については、歴史館のほうの展示も今回見に行った。その中で地質の違いで崖錐堆積物があってというような図があって、あと現地のガイドさんもそういう説明をして、ジオガイドも持っている方もいて、世界遺産の説明の中でジオの説明もしてくれていた。

逆に自然史館のほうで縄文時代の玦状耳飾りというのが出ているが、その石の石材について国内産ではない、大陸からのものだということで特殊展示をやっていた。

オブザーバー（調査員）：今の話しで、実は当人同士の関係性はわりと近いところにあって、例えば荒船風穴で行われている地質調査を下仁田ジオパークの学芸員が行っていたりとか、その説明内容に意見を出していたりとかある。逆に問題は、それが第三者的に見たときに連携が取れているようにはなかなか見えづらいところがある。それでこの我々の指摘事項としてパートナーシップのところに、民間の人とジオパーク推進協議会との間のパートナーシップだけではなくて、おそらくジオパーク推進協議会と例えば世界遺産担当部局だったりとか、看板を作成する時にお互い紹介し合うルール作りだったりとか、そういうところが必要だろうと思い指摘した。担当者同士は距離が近いところにあるので、見えるようにして欲しいといところも指摘した。

委員：可視性も含めて、歴史館の方に行って、ここがジオパークの拠点でもあるし、荒船が重複している資産だということが分かるところまでいっているのかなと不安としてあった。

委員長：他はあるか。

それでは下仁田を提案通りグリーンで認めるかどうかだが、反対の方はいるか。

一同：（意見なし）

委員長：賛成の方は手を挙げるか拍手をお願いする。

一同：（挙手及び拍手）

委員長：下仁田を再認定とする。

【記者発表資料作成（磐梯山、下仁田）】

※プレスリリース資料の文面を確認

【議題③ ユネスコ世界ジオパーク審査事前確認（現地確認報告）：山陰海岸】

委員長：議題③に移る。ユネスコ世界ジオパーク審査事前確認ということで、前回報告いただいてきた事からの変化等について報告いただきたいと思う。2 地域については 3 回やるわけだが、ここでは報告と課題、進捗状況についてだしていただいて、あまり議論の時間はないがお昼まで時間を取りたいと思う。

委員：山陰海岸ユネスコ世界ジオパークの現地確認を 2 人でやってきた。資料の画面共有をする。現地確認の意図として、前回ユネスコからの審査の結果を受けて出たリコメンデーションに対する対応状況のうち、現地で確認が必要と思われる項目を中心に見てきた。具体的にはサイトの整備状況や施設の展示、ガイドの説明状況、看板等。日程としては 10/31 に現地入りして 11/2 に現場を出た。文科省からも同行していただいた。行程については資料に記載してある通りで、湯村温泉の町歩きから余部空の駅、ジオパーク海の大地の自然館、鳥取砂丘ビジターセンターの施設を 3 つ見た後、玄武洞、それから玄武洞ミュージアムのショップ、ここは行程にはなかったが急遽訪問することになった。それから豊岡総合庁舎。11/2 の現地を出発する直前に玄武洞ミュージアムの中の見学をした後に現場を出た。

これらの施設の中で確認の状況の部分で星取表を作成した。現地確認の結果、ほぼ全ての項目についてプ

ログレスレポートの報告の正しい点が確認されたという結論に、当時はなった。鳥取砂丘ビジターセンターのところは△にした。これは課題の部分。それから玄武洞ミュージアムのショップについては評価をしていないが、これは今後課題になってくる。特に玄武洞ミュージアムの中身についてはかなりまずいのではないかと個人的には考えている。

実際の課題の部分について3つ示す。一つ目、鳥取砂丘ビジターセンターについてだが、実際に前回のユネスコの審査の後に整備された拠点施設になり、展示としては非常に分かりやすくて素晴らしいものもある。もともと鳥取砂丘にあったちょっとした小さい施設の中で、砂丘の波紋を作る風洞実験装置が個人的に非常に好きだったが、それも移設をされて、子供たちや観光客に対して砂丘が出来ていくプロセスやその変化を非常に分かりやすく展示している。それも引き継がれていて非常にほっとしているが、残念ながら外国語の説明がほとんどない。海外からの審査員が来られた時にはおそらく国際対応に対するリコメンドがでる可能性がある気がする。一応、現場のほうでQRコードがあり、それをタッチすると外国語の説明がでてくるような話しをしていたが、実際にやってみたら動作が確認できなかったので、これはちょっとどうなのかということで課題。ただ、これはあと2つの課題に対しては小さくて、この2つは非常に深刻だと思っている。

2つ目が玄武洞ミュージアムにおける地質資源の販売行為が確認された。これについては玄武洞ミュージアムの建物が新しくなって、国際的価値を有する玄武洞のサイトのほぼ近く、真向いに位置している。周りを遮るものがほとんどなくなってしまったので、審査員が目にするのは明らか。なので、行程に含まれていなかったとしても、「あの建物はなんだ、中に入れるなら見てみたい」ということが普通にでてくると思う。その審査員が地質資源の販売をしているミュージアムを訪れた時に一体どのような判断を下すのかというところは現場のほうで何とかしてほしい。ただ、全く販売行為に対して現地がノーリアクションではなくて、その行為をやめてほしいということは再三交渉し続けてはいるが、ミュージアムショップの岩石鉱物類の売り上げが、玄武洞ミュージアムの売り上げの中で非常に大きな位置を占めているので、販売をやめることがなかなかできないとおっしゃっていた。私たちだけではなく、現場はもっと困っていると思う。

3つ目が、玄武洞ガイドクラブが解散をする予定である点。というのは、来年度の4月から玄武洞が豊岡市立玄武洞公園となり、有料の施設となる。有料の施設を管理する指定管理者が地元の旅行会社になってしまったので、これを受けて、玄武洞でガイドサービスを提供していた玄武洞ガイドクラブが解散を決めたということ。玄武洞ガイドクラブのガイドの在り方については様々な憶測や目論見、考え等があったが、結果的にはあそこでジオツーリズムというものを何とか成立をさせて自立的な形でガイドサービスを提供してきたという実績があるので、その部分に関しては、本来プログレスレポートできちんと書くべきだし報告したほうが良い。グッドプラクティスの一つだと思うので、それはやったほうが良いとは思うが、残念ながら新しくリバイズされた山陰海岸ジオパーク事務局からの報告書の中では、この部分が報告書の中では全くなくなってしまっているので、リコメンデーションへの対応に対する回答として弱くなっている。少なくとも玄武洞ガイドクラブがこれまで玄武洞でその価値をきちんと伝える活動をしてきている、あるいは前回のリコメンデーションを受けてガイドのやり方や説明の仕方も変えてきたというのを現場で確認してきているので、その実績はやはり伝えたほうが良いと思っている。ただ、それを今後どうするかというのは現場で審査員と議論をしていってほしい部分ではあるが、それが最初からない状態で報告書を出すのは非常にまずいのではないかと考えている。

私個人の今の判断だと、今後、山陰海岸ジオパーク推進協議会と議論をして、少なくとも過去やってきた事はきちんとレポートとして報告した方が良いと。今後の事については、事務局のほうで対応していく方策を考えてほしい。具体的には新しい指定管理者に対し、玄武洞ガイドクラブとほぼ同じようなガイドサービスが提供できるような体制を作っていってほしいという事を勧告するしかないという気はする。

結論としては、大きな問題が山陰海岸では現地確認の後に出てきてしまっているので、それに対して来年

の早い段階までに何とか形を整えてもらうように働きかけをしていくしかない気がしている。

委員：一番大きな問題としては、ミュージアムショップの問題があると思うが、これをどういう風に捉えるのかというのはすごく難しいところだと思う。国際博物館会議 ICOM で言われているのが、国際博物館会議ではミュージアムショップの位置付けはミュージアムの追体験ということで、標本を購入した個人が博物館や美術館の経験を思い起こして、その標本を通してさらに人に伝えていくという機能があると言われているので、そことバッティングする。ただ、ユネスコのジオパークの考え方の中に地質資源の売買の問題があるということで伝えたが、ミュージアムの館長にバックグラウンドとして違法の行為だとか環境汚染につながる鉱山の採掘などの問題もあるとお話ししたら、「じゃあ、どこのものはいけないのか？そういうことを示していただければそれは取引きしないようにすることも出来る。」というような歩み寄りの言葉は見られた。

なので、そこのところはユネスコのほうでも世界の情勢を見ても鉱物や化石のフェアトレードや、どこがブラックな鉱山なのかというのも分かっていない状況なので、今後グローバルに見てそういう動きを作らなければならないのかというのを感じた。

じゃあどうするのかというのは深刻な問題だが、隠すに隠せない問題なので、向き合っていくべきだと私は個人的には思う。現状としては、ゼロスタートでユネスコの考え方を現地で共有して、今生業の一つとなっている鉱物や化石の販売について確認をして、これから意識をどう変容させてスタートしていくかというところが重要なので、逆にそこを見ていただくしかないのかなと思う。

もう一つ玄武洞ガイドクラブについて関しては、私のアンテナのはり方が全然だめで、聞いて愕然とした。問題は、すごく意欲的に活動していた方々がこれからどうなるかということ。その方々が、新しく第三者が立ち上げてガイドもやっていくので新しい人を募集し始めるのではなくて、活動の場としていた方々を、気持ちもそうだし、活動そのものを引き継いでいけるのかというのが見ていきたいポイント、判断ポイントだと思う。内情をヒアリングする時間もなかったので分からなかったが確認したいところ。

委員長：今、報告いただいたように深刻な課題があるという事が分かってきた。調査をした後にも問題が出てきている。これについて質問、コメントがある方はお願いする。

委員：鉱物の販売について、鉱物の産地はどこであるとか、そういった詳細はきちんと示されているのか。それとも単に置いて販売しているだけなのか。すぐ撤去するのがないとすると、そこのルートをしっかり示すことで、ちゃんとしたところから入っているよとか、そういったところから改善するのも手なのかなと思うがいかがだろうか。

委員：現地で見た限りでは、ちゃんと産地が示されているものが多かった。ショップで売られているものに関しては、不特定多数のものを集めたようなものも多数あった。

もともと館長さんは学者ではなくて、ある意味コレクターに近い方だった。様々な岩石鉱物を世界中から集めてきてそれを展示していたら、自分のところも置いてくれという形でどんどん石が集まってきたということをおっしゃっていた。

委員：2013 年に自然史系博物館のために ICOM の博物館の倫理規定というのが出されているが、今の玄武洞ミュージアムはこの倫理規定に引っかかる可能性がある。ICOM で行われている規程でも問題があるということが説明できるのではないかと思う。

委員長：これはルートを辿れれば良いということか。ポイントがよく分からない。

委員：保全ガイドラインとかそういったものが規定された上でというのがつくので、ルートや産地などのそういったものが証明されているだけでは足りないと思う。

委員長：ルート先でちゃんと保全計画に基づいたようなものの供給等をしているかということか。

委員：それも含めて問われているのではないか。

委員長：なかなか悩ましい。玄武洞のほうは、先ほど調査担当委員がコメントされたようなやり方しかないだ

ろうと思うし、今までの活動はちゃんと継続されるような形で発効されることが大前提だと思う。

事務局：玄武洞の情報をお知らせする。玄武洞ガイドクラブの代表から30分程前に「クラブを解散します」という正式な案内、ご挨拶というのがメールで届いている。それには、地元で掲載された新聞の記事等が添付され、本人のコメントとしては、「これまでの自分たちの活動実績が豊岡市長に理解してもらえなかったのは残念だ」という一言で終わっている。

それに合わせて今日の朝8:30過ぎに事務局のほうにその後の協議、調整の確認をしたが、その結果、今回指定管理を受けている全但バスや神姫バスは、ガイドクラブのガイドさん全員にそのまま残ってガイドをしてもらいたいということを希望しているそう。全員が残りたいと希望するかどうかは別だが、そういう風に今考えているとのこと。ただ、指定管理の話しがでた豊岡市側では、最初はそういったガイドへの配慮を全くしていなかったということで、後からになるが全但バス、神姫バスがその事実を知って、ガイドさんにも今後希望される方は全員受け入れたいということをコメントしている。

今度有料化される際に一人500円くらいの収入になり、コロナ禍前は年間13～15万人の方が来ていたものが今後の有料化後は8万人くらいで推移していくだろうという見込みがある。そうすると減免等もあるが、収入はだいたい3,000万円くらい入ってくる。そのうちの1,500万円くらいが指定管理者に指定管理料として支払われるので、施設の管理やモニタリングをしていくことと、バス会社なのでお客様を連れて来ることによっての運賃の収益を上げてそれで運営していくということになっている。

委員長：今の話しを聞くと、お互いに上手く決着をつけるような方向に歩み寄っているような気もする。

委員：今の話しに関連して1つ質問だが、豊岡市からの指定管理の発注内容、委託内容にガイドサービスの提供のような業務を含めて指定管理が行われているのか。

事務局：今の点だけで言えば含まれていない。ガイドに対しての部分は指定管理の中には含まれていない。指定管理のほうはあくまでも施設の管理と、事故等が起こりうる場所ということでモニタリングを委託内容にしている。これまでは500万円くらいの金額でガイドクラブのほうに委託がされていた。

それとは別に玄武洞を美しくする会がかなり前から活動していて、そこに市、県、国から負担金ということで400万円くらい支払われていた。合計1,000万円くらいがガイド団体のほうに支払われている。ただ、その段階からもそうだが、あくまでも委託としてでている部分は、施設の管理とモニタリングになる。

委員：状況を承知した。

委員長：いずれにしても今後の進捗を見極める上でも、もう一度調査に行った方が良いという気がする。報告書については、先程報告されている方向で行くしかないと私は思う。

その他、意見がある方はいるか。同行された文科省からコメントできることがあればお願いしたい。

日本ユネスコ国内委員会事務局：玄武洞ガイドクラブの件は、私も今知って驚いた。説明の時に指定管理者制度になることは聞いていたが、ガイドの話しは豊岡市の方は全くおっしゃらなかった。もちろんガイドの人達は引き継がれるのかと思っていたが、敢えて話さなかったのではないかと一瞬思ってしまった。それも含めた上での現地調査のはずなのに、そこだけ抜けていたとは到底思えない。我々は2日間に渡って玄武洞に調査に入っているが、その時も彼らは同行していて、その後に豊岡市総合庁舎で話しを聞いた時もその話しは全く出なかったので、それはちょっと残念だという気持ちがある。

あともう一つミュージアムの件だが、気になったのが、先程委員もおっしゃったミュージアムショップでもモロッコ産や中国産の石というのが明確に書いて売ってあるのをたくさん見た。その中で、どんな鉱物か分からないからそういう物は売れませんよね？という話しにもっていった時に、どういう経路であったものか分からない物というのを、「分かる物だったら売らないけど、逆に分からないなら売れるでしょ」という言い方をしていたのを私は気になっていて、分からないのだったら売らないでほしいし、分かるから売れるならそれはそれで良いけれども、発想がユネスコのマインドと大分違っていて捉え方としてどうなのかなとい

うのを感じた。

事務局の方とも話しをしたが、働きかけてはいるものの、結局そういう風な考え方になってしまうから難しいということをおっしゃっていて、山陰海岸ジオパークの事務局の人達だけでこれを変容させるのは難しいという気もしている。

委員長：悩ましい。どなたかご意見をお願いする。

事務局：今日は時間もないので、プログレスレポートを1月末に提出するにあたり準備は進めていかなければならないが、追加の調査も含めてこの後に何らかの調査はするということで調整をさせていただければと思う。

委員長：承知した。いずれにしても、今はこういう方向でやるしかない。ただ、アクションをいつ起こすかというのは年末にもなっているので難しい気がする。

委員：一つだけ確認だが、去年ユネスコにプログレスレポートを出す前にはJGCの皆さんがその内容をチェックするという過程があったかと思うが、今はどの段階まできているのか。英語を見たいが、まだ確定がどうか分からないので。

委員長：でてはきている。

委員：そのファイルは最終という考えで良いか。

事務局：最終は提出するものだが、今はJGCの皆さんに見ていただく段階には入っているので先日お送りした通り。今日は、その内容については時間が残っていないので無理だが、1月5日の次第の中には時間をとるように入れているので、それまでには皆さんに確認していただき、1月5日にはご意見をいただきたいと思う。細かな事はメールベースで結構なのでお願いしたい。

委員長：尻切れトンボになってしまうが、この辺で午前中の会議を終わりたいと思う。山陰海岸については引き続き5日に審議を行う。

【議題④ ユネスコ世界ジオパーク審査事前確認（現地確認報告）：阿蘇】

委員長：議題の④ユネスコ世界ジオパーク審査事前確認ということで、阿蘇のその後の進捗、課題について報告をお願いする。

委員：阿蘇について報告する。前回の委員会の時にかなり厳しい結果となった。それを受けて、10月18日から20日まで阿蘇の現地確認に委員長と一緒に行って来た。

現地確認で確認できたことだが、やはり博物館の業務とジオパークの運営が明確に切り離されていないという問題があり、ジオパークのスタッフが博物館業務を遂行していたりして、十分な業務が出来ていないことが分かった。また、ジオパークで雇用されているスタッフが、朝や夕方に開催される博物館の朝礼や夕礼に必ず出席しなければならなかったり、雇用契約書が結ばれてなかったり、ハラスメントがあったりということで、職場環境としても大きな課題があった。そういったことを現地で確認して、現地にいる間に委員長と阿蘇の会長と協議をしていただき、今後、世界審査でもそうだが、阿蘇がジオパークであるための抜本的な改善が必要であることをお伝えしたところ。

それ以外については、現地確認ではその他ビジビリティや、震災関連サイトの確認をしてきた。

ビジビリティに関しては報告書の通り確認した。今後新しいユネスコロゴへの貼り替えがあるので、それに合わせて効果的な看板の配置などの対応の見直しをする必要があると思う。

震災関連サイトの施設としては、東海大校舎や展望所のヨ・ミュール、小学校の空き校舎を利用した震災ミュージアムの整備がされていた。震災ミュージアムのほうでは、東海大の OB が協力隊として着任しており、館内の案内やデザインを担当しながら、亡くなった後輩への想いを持って施設運営にあたっていた。

ガイドさんも活躍しており、ジオパークとしての貢献やビジビリティに関しては少し低いところはあるが、

今後、施設とのパートナー関係の構築が課題になってくるだろうと思う。

市町村を見ると、産山村や小国町ではオーバーツーリズムが発生していた。産山村では水源地へのフォトグラファーの侵入や、小国町では鍋ヶ滝へ向かう道での交通渋滞が発生して、それが生活に大きな支障をきたしているというオーバーツーリズムの問題があった。それぞれの町村で対応をしているところ。小国町では渋滞緩和をしようということで、クレジットカード決済可能な事前予約制を導入して、実証実験を始めているところ。

ジオパークは現時点では表立って協力関係を結んでいたりとか、観光公害の問題に対して対応するということは出来ていない。地域の実態についてプログレスレポートにも反映されてこなかったので、今後はこういったことを反映していく必要があるという話しをしてきた。

移住者や若手がジオパークに参加して、少し面白がっているところもあるので、そういった人達が見えてきたというのは明るい兆しとしてあった。

現地確認中の 10 月 20 日に噴火があった。噴火の際の対応だが、噴火の際に私達は産山村でヒアリングをしていた。直後に阿蘇火山博で対策本部が立ち上がり、館長が対応した。それ以外のスタッフは博物館に戻ることが出来ないので、持っているスマートフォンを使って情報収集をしながら、Twitter や Facebook で情報発信をしていた。第一報は学術専門員が投稿されたとのこと。情報収集の中で、地域の方から噴火の写真や動画が事務局員に送られてきたり、熊大からの問い合わせがあったりして、ジオパークのスタッフが噴火対応をしている状況であった。ただ、災害時対応マニュアルみたいなものについては、火山博としては持っているが、それがスタッフの中で十分に共有されていないという課題があるとのこと。ジオパークとしても対応方針やマニュアルは準備をしていないそうで、現場で対応をしているというのが印象的だった。その後の対応として参考になったのは、規制エリアと行ける範囲、行けない範囲を記したマップを作成して、観光における風評被害を最小限に抑えようとする活動を、事務局員さん中心に地元の観光協会と一緒に展開をされていた。

その後の動きについても報告する。阿蘇ジオパーク推進協議会では事務局長の交代があった。事務局についても、今は博物館内にあるが 2022 年 4 月に前に事務局があった阿蘇デザインセンターに戻るとのことで調整がされている。博物館からのジオパーク運営の切り離しと、ジオパークの再組立てが今後行われているところ。

委員長：前回色々な課題があったので、直接会長と面談をして、ジオパークで何を実現したいのか、世界遺産にリストアップされ単にタイトルコレクターになっているだけではないのかということをぶつけた。色々な問題があるということを指摘して、今博物館の中に置かれ活動していることで色んな障害が生じていることも指摘した。

常務、館長とお会いして、先程のお話しにもあった朝礼、夕礼等が義務付けられていて、しかも交通が非常に不便な所に博物館自体があるので、朝礼に出て下に降りて作業をすると朝礼だけに 3 時間とられて、夕礼に間に合うように帰ると何もする時間がないとのことで、これが働き方改革と逆行している傾向であるのでこれはハラスメント的だという指摘をした。本人達にもしたし、会長にも話した。

雇用契約については、常務が渡していると言っているのに、新人の人達は受け取っていないという食い違いもあって、何とかしなければいけないということを強く伝えてきた。

女性の仕事、男の仕事という業務分けをやったり、非常に不自然なハラスメント行為があった。

最後に会長とお会いしてそういうことを指摘し、改善される方向になったと思っている。いずれにしても地元の協議会が決めることなので、それについて私達は口をはさむわけではなくて、アドバイスをしてきた形になる。

日本ユネスコ国内委員会事務局：私のほうからは、特段追加ということはないが、我々が突きつけた質問とし

ては、“ユネスコ世界ジオパークである阿蘇”という意義をきちんと考え直してほしいということだったと思う。世界遺産になるには道のりが全然遠いので、そのためのホップステップジャンプのように考えられているのではないかという印象を受けた。

阿蘇はユネスコ世界ジオパークではなくても観光客が集まって来るというのが、ユネスコ世界ジオパークとしての活動にとって、あまりポジティブに働いていないという印象を受けた。だからこそ、「これから先もユネスコ世界ジオパークを続けたいのか？」という質問を突きつけてきたのだと思っている。それに対して、皆さん口を揃えて「ジオパークであり続けたい」とおっしゃってはいるが、やはり初心に帰って考え直してほしいというところがあった。

今回は事務局も変わり、新事務局長が一所懸命やってくれているのでありがたいし、これから期待できるのではないかという印象を受けているが、近隣の市町村の関係は基本、新事務局長やその他のスタッフでしか構築できていなかったのではないかという印象を受けているので、事務局も交代したので、そこはますます活動を深めていってほしいと思っている。

職員の方は大分疲弊しており、4 月以降辞めたいという話しを伺ったのはすごく心配。これから先もフォローしていく必要があると思っている。

委員長：追加コメントを事務局からお願いする。

事務局：事務的な事をお伝えする。委員の皆さんには阿蘇から今までに 2 回文書で報告がなされたので、それはメーリングリストでもお送りしている通り。

1 回目は事務局体制の変更、2 回目は先日の 12 月 12 日の経過ということで、これまでの経過と阿蘇デザインセンターに移行手続きをこれから行うことが決まりましたという通知だった。その中に参考資料として、12 月 2 日から 10 日にかけて色んな首長さんたち、関係者等々と 7 回協議をしたという資料がついていた。

また、14 日の締切日に間に合うようにプログレスレポートを提出されたが、そこでのマネジメントのところの記載等が博物館の体制のままになっていたので、移行が決まった以上、1 月 31 日現在のものである必要はあるが、2022 年の夏に審査員が来るのであれば、ある程度アップデートしておく必要があるのではないかということで相談をさせていただき、差し替え版が昨日届いたので皆様にお送りしているところ。今日は時間がないので、この後 5 日までにご確認いただいて、メーリングリストや 5 日の会議の中で重要なポイントについてはご意見をいただければと考えている。

特にマネジメントのところをいつの時点の何を書くというのは悩ましい。差し替え版を見てもまだそう思っているし、ご本人達もコンサベーションのところとかヘリテージの書き方はすごく悩みながら書いたとお聞きしているので、重点的にその辺りも見ていただけたらと思う。よろしくお願いする。

委員長：只今の報告に対して質問、コメントをお願いする。

委員：現地に行けなくて申し訳なかった。事前に色々オンラインで調査をさせていただいて、大きな問題があった点についてはかなり改善された気がする。ただ、プログレスレポートの表紙の写真が中岳の噴火口である。阿蘇の観光の売りは中岳の噴火口かもしれないが、ジオパークとしては世界最大級のカルデラをアピールできていないのが残念である。地球科学の専門員がどのように認識しているのか気になる。

あと、プログレスレポートの出来が悪かった言い訳として、若い人が入ってきて業務の引継ぎが上手くいかなかったということを言われているが、それは責任の転嫁で、マネジメントする側の責任を若い人に押し付けたような文章があったのが非常に気になった。

委員：マネジメントボディが変わるというのは、そもそもユネスコに伝えなければならないと思うが、そこら辺の手続きはどうか。プログレスレポートを出す同じ時期にマネジメントボディが変わることが決まってすごくややこしい状態だと思うので、ジオパークで運営するところがいきなり変わっているのはすごく指摘されると思う。

事務局：それについては確認もしているので事前にお伝えしたいのだが、まず、マネジメントボディについては変わらない。協議会のまま。事務局の場所が博物館で、事務局員が雇用されているのが現在の博物館だが、それがデザインセンターに変わるということなので、マネジメントボディ自体が変わるということではない。

また、マネジメントボディが変わった場合にどういう手続きが必要なのかというのはユネスコには確認しており、その場合はプログレスレポートにプログレスとして記載してくれれば良いと言われた。ただ、連絡先が変わったりだとかは事務的にもちろん通知はしてほしいが、変わること自体はプログレスレポートに書いてくださいというふうに回答をいただいた。

委員：ありがとうございます。

委員長：その他はあるか。この問題は次回の5日にプログレスレポートを見ながら議論したいと思う。

【議題⑤ 再認定審査地域審査：秩父】

委員長：次の議題⑤は秩父。これについては私が報告する。

一覧表を見ていただければ分かるが、審査は11月3日から6日まで3名で行った。イエローカードが出た2年目ということで、良いところを出来るだけひろってグリーンにするという方針ではあったが、行った3名ともグリーンで良いのではないかということになった。

前回、イエローが出た後に色んなアクションがあった。前回の審査の態度があまり好ましくなく、少し誤解を与えたところがあった。それについては昨年のうちに私とJGN事務局長が行ってどういうことかという事情聴取をしたのと、その時の本意はこういうことであるという解説はした。そういう誤解が解ける中で色々進捗してきたと思う。

大きく7つの課題があるが、地域内におけるジオパークの理念の共有は、完全に共有されているとは思わないがかなり進んだ。特に公式ガイドブックというのが出来て、それは地質屋さんではないコアメンバーの人が書き上げたが、それが非常に分かりやすくて活用されているとのこと。笑点のメンバーの方が宣伝もされていたし、かなりジオパークの理念が共有されるようになってきている。

ただ、前回調査員のインパクトが非常に強く、「理念」「理念」と言ったものだから、逆に地質遺産を強化しなさいというふうに誤解された節があった。そういった意味でガイドがジオジオしているところが結果的に残っている。

2番目に“スタッフの充実”。これについては、外国人の専門員を1人追加したということで4人体制になっている。4人体制では足りないが、それを補う形で、運営員会のコアメンバーの5人がこれに加わっている。秩父市と小鹿野町の非常に積極的な人が絡んで、そして博物館の3名がコアメンバーとしてこの事務局の運営に参加している。特にその中で元立山黒部専門員が加わったということで、非常にジオパークとしては分かりやすいものに展開できるようになってきたと思う。

3番目の“ジオパークとしての計画・指針”はまだ不十分で完成していない。大枠は出来たというところで、どういうわけか、地質のパートだけは完璧に書いてあるが、それ以降についてはまだ書き込めていないのが現状。これについては至急作る様に指摘をしている。

4番目の“保全計画”については、これもちゃんとした計画が出来たわけではない。一応、サイトカルテを充実させ始めてきているということで、計画に載せているとのこと。

“ネットワークの参画”は積極的に行われてきた。

“拠点施設の整理”は、今まで13拠点あったが、4つの拠点を主要拠点とし、しかもそのうちの1つ埼玉県自然の博物館を主要拠点とするとのこと。そこも拠点としての整備が進んできているように思う。

最後の“ガイドの創意工夫と看板の充実”。看板についてはリニューアルを開始しているところだが、まだアンバランスなやり方が散見される。ガイドについてはやはりまだ地質以外の事を含めた展開をしてほしい

のが正直なところ。

優れているところでは先程言った立山黒部の元専門員が自然史博物館の学芸員となって、コアメンバーになって事務局に参加しているということ。

新しい事業者、例えば皆野町にあるホテルのオーナーがジオツアーを自主的にやっている。雲海を山の頂上から見るツアーを毎日のように展開している。奥秩父のほうでは自然を楽しむ色んなアウトドアアクティビティと結びつけたツアーを行われているし、環境省のお金をもらい甲武信エコパークと国立公園の中でもあるが、そういう中でいかにジオパークと連動した看板を作るかということもプロジェクトとしてやっている。横瀬町の幼稚園のタテノイトの人、その人は東工大の地球科学の博士だが、帰って幼稚園を経営しながらジオガイド、ジオパークの概念を広める非常に重要な役割を持っている。こういう新しい事業者が入ることによって、ジオパークの活動が非常に活発化しているように思う。

その一方でジオジオしているところが多くて、例えば秩父市長が会長だが、秩父の教育委員長もこの４月に交代したばかり。色んな場で話しをして、ジオパークはどうですか？と言うとジオパークは地質学だから難しいというような言い方をする。ちょっと距離を置いている感が強かったが、市長たちが一番気にしているのは、やはり、地域の伝統やお祭りをものすごく意識している。でも、お祭りがどうしてできたのかの背景を一緒に考えてみましょうと言うと、これはやはり地質、ジオの恩恵ですねという具合に分かってくれるので、まだそういう展開が中でうまくやられていないという印象を受けた。

そういう色んな問題があるが、今のお祭りに絡めて、世界文化遺産というのをジオパークの中にきちんと位置付けられるはずなので、それをきちんとして欲しいというのが大きな課題。

それから先程のコアメンバーというのは運営部会というのがあって、その部会のコアのメンバーを事務局に参加させているが、これはあまり持続的な方法ではないので、それをもう少し持続的な方法に変えていくことを考えて欲しいということが要望。

看板についてはもっと改善していく必要がある。

ガイドについては、認定制度を入れたのは良いが、ちゃんとしたジオパークのガイドとしてはなかなか上手くいっていない印象を受ける。引き続き改善が必要。

協定についても、協定先のリストは作ってはいるが、具体的に協定をまだ結んでいない。

教育については、小中学校で実際にジオサイトを使ったジオパーク学習が行われている。ただ、これも地域全体の取り組む仕組みになっていないので、これも今後の課題になっている。

以上になる。これについて質問やコメントをお願いする。

事務局：民間のガイドはすごく良い活動が生まれていた。今までのガイドさんは地質中心のガイド活動をしているということだが、連絡会なようなものをつくって、今の新しい活動のほうに引っ張ってあげるという活動はないのか。

委員長：残念だが今のところはない。だが、新しい事業者なので期待を寄せているというのはある。これまでは秩父まるごと博物館が非常に地質ベースで紹介してきたところがあるが、いまだにどこに行っても地質学発祥の地がものすごく先頭に立って出てきていて、それによる弊害はまだ見え続けている。

先程言ったお祭りについてだが、秩父盆地という閉鎖された所に生活圏があるが、産業がないその中で養蚕をやった。絹織物で世界的に注目されるようになって、それを売り上げるためにお祭りを展開するようになった。そのお祭りがいまや世界遺産にもなっている。もとをただせば、これはジオの閉鎖された環境が作った文化遺産である。そういう事をきちんと説明すると市長は分かってくれるが、逆に事務局の人はそこまで話し込めていないところが大きな課題としてまだ残っている。

委員：改善したメンバーの中で立山黒部の元専門員の存在は非常に大きいと思っている。先程の阿蘇の話しと少しかぶるかもしれないが、その方はあくまでも自然史博物館の学芸員であって、ジオパークの仕事がどれ

くらい継続的に出来るのかというところが少し不安でもあるので、せっかく良い動きが出てきたところで彼が持続的にその活動に関われるのかどうかという手応えは見通しとしていかがか。

委員長：埼玉県の自然史関係の博物館はここだけ。しかも代々ジオパークにはすごくしっかり取り組んでいる所で、ここの学芸員のうち３名がジオパーク担当になっている。特に彼はジオパークを主に担当する人と位置付けられている。そういう意味でも博物館の中でもジオパークをやることが彼の仕事になっている。なので、今の館長が続く限りは大丈夫かと思っている。館長ともそういう話しをして確認している。

委員：彼が立山黒部でとても頑張っていた姿を見ていたので、また力を発揮できるのであればご本人にとっても非常に幸せなのかと思った。

委員長：彼が行ってからかなり変わりつつあると思う。大変大きな力になると思う。

委員：専門分野で Dr.をとった幼稚園を経営されている方は協議会のメンバーなのか。幼稚園の活動にそういった意識が反映されているのか。

委員長：パートナーには真っ先にリストアップされている人で、組織代表になっているので協議会のメンバーではない。

委員：ユニークな存在で面白と思った。

委員長：東工大で「Nature」を含む国際誌に何本も論文を書いた方。その方が突然、意を決して配偶者の地元で幼稚園を経営しながら、幼稚園の方にもジオの話しをして、保全が重要であるというのを現場で展開している。幼稚園の生徒を現場に連れて行って、「この木がなくなったらどうなると思う？」ということを説明すると、生徒たちのリアクションが非常に大きいと言っていた。

　ジオパークの概念を彼は非常に良く理解していて、それを逆に地域に還元しようとしている。先程のガイドの団体のちゃんとした指導者になれるのではないかと私は感じた。

　今言ったのは、パートナーシップの候補者。これはすでにリストは出来ていて、今、協定書をつめているところ。その中には新しい事業者も、今の方も含めて入っている。

　博物館の人でもジオパークは地質が最優先という言い方をする人がまだいるので、今後は注視していかなければならないかと思う。

　特になければ秩父は再認定でよろしいか。反対の人はいるか。賛成の人は拍手をお願いする。

一同：(拍手)

委員長：秩父を再認定とする。

【議題⑥ 再認定審査地域審査：男鹿半島・大潟】

委員長：続いては男鹿半島・大潟。報告をお願いする。

委員：3 人で男鹿半島・大潟ジオパークに行ってきた。ここは前回、条件付き再認定になっており、その際の一番大きな問題が事務局体制。もう一つはサイトが何でもかんでもひっくるめてジオサイトになっているので、そこの価値を確認し、きちんと整理してジオサイトカルテを作って欲しいというところが大きかった。

　基本的には前回の課題は全て解決、着手せよと言われているものに関しては着手していた。新たな課題としては、サイトカルテに基づき保全計画策定に着手して欲しいということがあり，それについては話し合いを始めている。基本計画の策定がされており、海岸に小島がたくさんあるので沿岸海域部分はそれを含めて再設定，という課題についてもきちんと再設定がされていた。

　大潟村干拓博物館のジオパークの展示が前回審査時には目立たなかったが、きちんとジオパークの展示も拡充されていた。

　全体として非常に教育を中心とした活動が活発に行われているジオパークである。この点は前回も評価されていたが、当時、非常に事務局の体制が弱くなっていたという問題があった。それについては，ジオパー

クを立ち上げて日本ジオパークの大会をやった頃に在籍していたジオパークに詳しい人を再度戻して、専門員も拡充されており、現状はすごく良い体制になっていると思う。

活動としてとても良かった点は、ガイド団体が自分たちでサイトごとにリスク管理マニュアルみたいなものを作っており、これは大変素晴らしい。是非日本ジオパークネットワークの中で紹介してくださいという話しをした。

ジオパークの学習センターが男鹿市にあるが、そこに優秀な職員がおり、非常に活発に活動し、地質、地形、防災、環境教育、文化歴史の様々な教育プログラムを作っている。野外での様々な教育活動を活発にサポートしている。秋田県内から実習みたいな形で、多くの学校が訪問している。そういうこともあり、現在、非常に教育旅行の受け入れが活発になっている。県外に修学旅行をするのがなかなか難しい秋田県内の学校が、男鹿半島・大潟ジオパークに来て修学旅行をする、あるいは大潟村の学校が男鹿半島・大潟ジオパークの中を改めてきちんと見て、秋田県の他のジオパークに行って大潟村に泊まる修学旅行など面白いことをやっている。

教育プログラムだけではなく、ガイドブックやパンフレットに非常に優秀なものがある。この2年に特筆すべきところは、教育だけではなくて、男鹿の水族館や寒風山の回転展望台をやっている会社との連携がある。連携が進んだ経緯は、ワンコインガイドという500円で寒風山の展望台の周りを2～30分案内する、あるいは水族館の周りを2～30分案内するというプログラムが当たって、それを見て会社のほうも乗り気になりジオパークと協力しようということであった。男鹿の水族館は，水族館とその周りの野外をジオガイドのガイドと組み合わせるプランを提示して、現在教育旅行の営業活動をジオパークと一緒にやっている。

最初に事務局体制の強化という話しがあったが、若い女性が現在2名いる。この2名が大変元気で、若手職員を中心に様々なジオパーク商品を考える取り組みにも励んでいる。

全体として、前回の課題も解決しており、この2年活発な活動もしているということで、グリーンカードで良いのではないかという判断に調査員3人で至った。

今後の課題としては、男鹿市は高齢化がものすごく進んでいる所で、10年前に立ち上がったジオパークを担っている地元の人たちも歳をとって高齢化している状態。せっかく良い活動をしていて、民間との協力で様々な実際に経済的活動に繋がるような事を行っているので、もうちょっと働き盛りの若い人が加わるような工夫をしていただくと良いのではないかというのがこちらからの提言になる。

委員：初めて調査に参加させていただいた。現地のテンションがどのような感じか心配も一部あったが、とても印象的だったのが、何人もの方が再認定のためにやるべきことをやったというアスリートみたいな清々しい顔でつぶやいていて大変印象的だった。その結果が先程の報告のような様々な成果に結びついていたのだと思う。

他の地域でもそうかもしれないが、コロナによって地元見直しみたいな、やむを得ず修学旅行に行けなくてそうなった部分があるが、それが何らかの形で活かされていくような工夫を積極的にやっていただけるとさらに良いなと思った。

男鹿は高齢化が進んでいるだけではなく、人口の減少も凄まじくあるようだが、そういった地域活性化への思いが市長、村長のリーダーシップのもと、皆さんに共有されているので実ってほしいと思う。

委員長：ただいまの報告について質問、コメントをお願いする。

委員：途中からしか聞けておらず途中で説明があったかもしれないが、海域部分のそのエリアの体制の検討も行われたということで、海域部分のそのエリアの保全措置はどんな感じで講じられているのか。

委員：基本的には国定公園も海域部分を含めて指定されていて、それにならってエリアを決めていた。国定公園の仕組みの中で保全されているという言い方をされていた。

委員：そうするとエリア設定は国定公園の海域の区域と合わせる形の設定か。

委員：その通り。
委員長：事務局体制はどのように強化されたのか。
委員：人数が増えたのとジオパークの立ち上げ時にいた市役所のスタッフが2人戻ってきた。分かっている人が戻ってきた。それもあって、指摘のところに書いたが、特に行政側のほうで次のジオパークを担える人を育てながら体制を維持して欲しいというようなことを今回のリコメンデーションには書きたいと思っている。
委員：ワンコインガイドについて質問だが、前は完全に無料というツアーしかなかったのか。あと、個人的にはワンコインガイドは良いことだとは言えないのではないかと思っている。
委員：もともと有料のガイドもやっている。コロナで全然お客さんが来なくなったので、展望台に来た人にお試しみたいな感じで、テントを張った場所にガイドが2、3人待機し、1人500円払うと20-30分くらい案内してくれる。コロナが終わったらまた来てねというような、コロナ対応のイベントが始まったというように聞いている。
委員：承知した。
委員：先程おっしゃってくれていたものの中に応援商品があった。それは、認定商品や開発商品が大潟村ではなかなか根付かなかったので、事務局の若い方達が中心となってジオの理念に合致するものを応援するということが行われていて、それが上手く行き始めている。メディアに取り上げられたり、秋田県の他の地域のコラボ商品に繋がったり、大潟村の道の駅でも結構目立つ所に商品が売られている。これは新しい女性スタッフの方がイラストを描いた看板バッチをつけて、販売促進に寄与しているので可能性があると感じた。
委員： 秋田県内は日本で一番ジオパークが多い都道府県で、その中で連絡協議会を作っていて、そこで男鹿半島・大潟ジオパークが言い出しっぺで秋田県内のジオパークの教育プログラムを集めた冊子を作っている。それを秋田県内の小中学校に配布するというプランも作っている。中身としては課題もあるが、そういう取り組みを積極的に発案して実行するということが出来ているという意味では、事務局のスタッフの在り方としては非常に良い雰囲気でまわっているような気がしている。
　課題は、調査された委員もおっしゃっていたように、次のプレーヤーがあまり育っていないので、そこをどう育てていくか。若い女性職員2人が元気なので、それを含めて別のスタッフをジオパークの楽しみや恩恵に関われるような仕掛けになっていくと、どんどん良くなるような気がする。
事務局：1つ前のワンコインガイドの補足だが、オーダーが来てガイドをするのとは別に、寒風山の展望台の所で待っていて、お客さんでお願いする人がいたら500円で導入の部分だけをガイドするというような仕組みを新たに導入したということだと思う。
委員長：同じ仕組みを伊豆半島の石廊崎でもやっていた。
　その他はあるか。なければ再認定という形にしたい。反対の人はいるか。
一同：(反対意見なし)
委員長：賛成の人は拍手をお願いする。
一同：(拍手)
委員長：男鹿半島・大潟を再認定とする。

【議題⑦ 再認定審査地域審査：三島村・鬼界カルデラ】
委員長：続いては三島村・鬼界カルデラ。報告をお願いする。
委員：三島村に3人で行った。前回の2020年3月に三島村・鬼界カルデラは条件付き再認定になった。3人で10月18日から21日まで滞在し、初めて3つの島を全部見たという審査になった。前は天気の関係で全部の島に行けなかったりと色々あった。今回も波の影響で1つの島の滞在が短くなってしまったという点もあっ

たが、3つの島を十分まわれた。

前回の指摘事項はかなり多かったが、ほぼ着手か対応に向けて進んでいる。一番目は訪問者数や観光客の人数の調査だが、前は観光のマーケティング、観光戦略を立てるにはそもそもデータの収集をしていなかった。そのデータの収集に向けての取り組みとしては、アンケートを作ってフェリーの船内にアンケート回収BOX を設置してサンプルを集め始めたが、コロナの関係で来島自粛の要請が三島村ではかなり強かったそうでお客さんが全く来られないこともあり、サンプル数が十分に集まっていない。一年間で 17 件だと聞いている。引き続きそのアンケートを実施してサンプル数を増やすと事務局ではおっしゃっていたが、アンケートの代用として、認知度調査をインターネットで行い、そもそも三島村が知られているかどうかというアンケートをやり、認知度を上げるための取り組みをしなければならないという認識であるそう。

2 番目としては全体計画。今までなかったとのことなので全体計画を策定すること。アクションプランが策定されて 2020 年 8 月に公開されたかと思う。策定されてはいるが△をつけた理由としては、かなり単発的な内容で、出されている課題に対してはどのようなアクションを起こすまでしか書いておらず、長期的に何を目指すかが欠けているのもあって、今回の指摘事項にもそれをちゃんとするように指摘して、引き続きアクションプランに関しての指摘事項をあげているところ。

3 つ目は、見どころに辿り着くことが困難でアクセス情報の増強が必要ということで、ここは対応がかなり丁寧にされていた。まずはジオパークのサイトで、各サイトの位置情報をつけたり、新しいパンフレットを作り見どころ紹介にアクセスの情報を入れたり、Google マップで今までピンを落としていなかった場所がいくつかあったとのことで、そこを改善しアクセスを分かりやすくしていた。そして、竹島の港に総合案内看板を設置してそこに竹島の中にどのような見どころがあって、この島の入り口からどうやって行けば良いかピンポイントで分かりやすく説明があったので島ならではの強みかと思う。

4 つ目は、フェリーターミナルのビジビリティ。フェリーターミナルの中や観光案内所、宿においてのジオパークの可視性の向上の指摘があったが、それに対しては対応をし始めてはいるが、個人的に同じ島に住んでいるも者としてまだ不十分ではないかというところが正直ある。観光案内所はジオパークの案内もあるし、フェリーターミナルの中もポスターやのぼりがあるし、船に乗る時に使うタラップにもジオパークの横断幕があるが、船内の情報コーナーの中にジオパークの案内パンフレットが全くない。九州の他のジオパークの本などはあるが、三島村のパンフレットがなく、さすがにびっくりした。これは早く置くようにお願いしたところで、対応していると信じたい。

5 つ目は、観光客向けの防災対応及び対策の積極的な推進だが、そこもかなり改善が見られた。デジタルサイネージを用いた防災情報の発信はされており、鹿児島大学と一緒に協力して、大学が作ったデジタルサイネージを観光案内所や、鹿児島市内にある三島村役場の前、島の中のいくつかの場所にサイネージを設置している。今後は船の中にもデジタルサイネージを設置することが予定されている。船内はポスターや、貼り物で今の噴火警戒レベルについてや、島の中の避難所はどこにあるかになどの情報を積極的に発信していることを確認した。

6 つ目はジオストーリーについて欠けているというところが、まだ十分に対応していない。対応としては、住民と一緒に講座を開いて、住民からの声を拾うというステージから、ステージ 2 としてストーリーを作成していくというのがあるが、まだステップ 1 の中の三島村魅力発見講座を開催していて、島民が語れる情報を発掘する段階だと事務局から聞いている。ストーリーを他の島民と一緒に作るステージにまだきていなくて、コロナの関係だとは思うが十分話す段階まできていない。

7 つ目はサイト台帳のサイト整理の事も指摘されていたが、3 つの島全部のサイトの台帳と、全部のサイトに対してかなり詳しい情報の台帳を作成したというのを確認した。

最後の指摘事項としては、協議会と事務局の体制の見直しのところだが、部会、事務局との業務を明確に

分担することが指摘されて、それに対しては、今は事務局が役場の中にあるが事務局員は9人で、その中の3人が主にジオパークに関わっている職員。その3人の中の1人だけが100%ジオパーク専任の職員がいて、それ以外は 40%と事務局長が 25%であり、かなり人材不足の状況だと思う。人材不足の要素も他の事業に波及効果があり、ストーリーを作り上げることや、専門の事を分かりやすく伝える職員が不足している状況が続いているのが引き続き課題だと思う。

4つの部会があり、その中でガイド部会が活発に動いている。それ以外の3つの部会はコロナ禍の中で策定されたこともあって、まだ参加者の選任や話し合うことが十分に出来ていないと聞いている。

優れた取り組みとしては、調査に行った3人で色々話しをした結果、4つを取り上げている。防災体制の構築のことと、教育の取り組みなど。教育の取り組みはとても面白くて、「地球科」と書いて「ジオ科」と読むというカリキュラムを作って、教育委員会の多大な支援とサポートのもと運営している。島は3つあり4つの学校がある。生徒数が80人の学校が3つの島にあって、教員が50人でかなり手厚いサポートが出来る体制だと思う。学校内の取り組みでは、地元に根差した地質と関係しているもの、植物と関係している自由研究、後は一つの学年の中ではなく学年を超えた取り組みがあって、子供たちにかなり良い効果を与えているのではないかと思う。

3つ目は大学との連携があるが、神戸大学と九州大学、鹿児島大学との正式な強い連携が結ばれており、研究のサポートや、島の中の研究で使われる装置を置くなどのサポートをやっている。

事務局員は少ないが、地元でかなり頑張っている人たちに何人か会った。一人一人が面白い取り組みをしている。その中には毎年出版されているジオパークカレンダーもあり、かなり地元を深く調べていて、無形文化遺産や失いつつあるものなどをピックアップしていて分かりやすく説明している。学校に全校配布しているので、ジオパーク認知度が100%なのではないかと事務局が言っていた。

指摘事項についても色々と良い取り組みがあるが、引き続き指摘事項としては運営体制のところでは長期的なアクションプランを作ることと、PDCAのサイクルを示すことで効果を図れるアクションプランにして欲しいことと、地域住民の参加を強化して欲しい。今はコロナの関係があったかと思うが、事務局と地域住民のコミュニケーションの場が少ないことと、コミュニケーションを増やすこと。

あと一つ、問題としては、エリアのことを示す事で気付いたのだが、今三島村と書いているジオパークのエリアが四角い。具体的に何の根拠の上で定めたかよく分からないエリアになっているので、それをもう一回見直して、根拠をもとにエリアの再設定をお願いしたいと思う。

引き続きストーリーの改善と作成に取り組んでいく必要がある。

また、ガイドの内容に関しても指摘事項であげており、ジオパークの発行している内容がかなり学術的であり、ガイド側がそれをどうやって分かりやすく説明するかが分からないところがあるので、ガイドさん達が分かりやすく伝えるような体制を作って欲しい。

教育としては、ジオ科の取り組みがとても進んでいるが、そもそも三島村として教育員会が発行している副読本の中で、かなり内容が古くジオパークの良さが全く入っていないということがあって、推進協議会がそれを教育委員会と一緒になって改善して欲しい。

事務局と事業については、持続可能な開発の目標の視点から取り組みを整理して欲しい。SDGsの取り組みはいくつかやってはいるが、3日間の調査の中ではSDGsという言葉は全然出てこなくて、そもそもあまり意識していない印象を受けてしまった。なので、それをちゃんと考えて欲しい。

防災に関しては、全島のハザードマップの作成を指摘したいと思う。今の良い取り組みをさらに推進して欲しい。

最後に施設のことだが、今は2つの施設があり、1つは前に村の資料館であった所をジオパーク資料館にし、そこは主に地質と噴火やカルデラの事しか展示していない状況。もう1つは黒木資料館という所を整備

中。そこは文化の事が紹介される予定だが、植物の要素が全く見えなく欠けているところであるので、ジオパークのあらゆる自然が分かるような内容や、もうちょっと分かりやすい展示の仕方をお願いしているところ。

とても長くなってしまったが、結果を言うと3人で相談した結果、指摘事項に対しての取り組みが進んでいるところと、状況によって進んでないところがあるが、ほぼ対応に取り掛かっているのと、褒めるべき取り組みもいくつかあったので、今回はグリーンカード再認定の提案をしたい。

委員長：丁寧に説明をいただいた。只今の報告に対して質問をお願いする。

委員：もともと役場の人だけでは無理なので、島の人にどんどんやってもらわないとジオパークが出来ないという事だが、報告でもおっしゃっていたが、そこはすごく活発にやっていると思って良いか。

委員：事務局員が本当に人員不足の状況になっているので、逆に地元の人達が動かなければ進まないところが多いと思うし、部会に入っている皆さんがやはり島に住んでいる人達が多いので、個人的には部会に期待しているが、今のところだとそこまで動いていないところがあるかと思う。

ただ、人材不足で思い出したので言っておきたいのだが、審査の中で地質専門員がいない問題を指摘していて、最終日に会長である村長とヒアリングをした時には調査員からの地質専門員がいたほうが良いのではないかという指摘を受けて、その後に事務局内で協議をした結果、2022年4月から採用する方針になっており、保障するということになった。今まであまり上手く進んでいない対応、例えばストーリーの事だったり、ガイドの内容だったり、人が増えてさらに学術的な事を分かりやすく説明できる人材が奇跡的に現れたら進むのではないかと思う。

委員：教育のところで「ジオ科」という授業が取り入れられているようになったと言うのはとても興味深いと思った。これは小学校と中学校に設けられてということか。

委員：その通り。小学校と中学校は一緒になっていて、さらに生徒数が少ないので、例えば5年生が自分でやっているのではなく、中学生と小学生が同じプロジェクトを進めているというやり方。

委員：高校は進学で他の場所になってしまうのか。

委員：その通り。

委員：ここで学んだ子たちが進学して、一旦この地域を離れる人も多いと思うが、そういった人たちがいずれこの地域に戻ってきて、ジオパークの活動に関われる人が1人でも2人でも出てくると大きな力になるのではないかと思って聞いていた。

委員：人員不足の事務局の中で、カレンダーを全戸に配布しているのは、自治体ではなく推進協議会の予算の中で発行しているカレンダーかどうかを確認したいのと、見てもらいたいようなセンスの良いカレンダーだったか。

委員：カレンダーは事務局が作っているのではなく、島にいる協力者に委託して作ってもらっている。ちゃんと協議会の中にカレンダー作成の予算が入っている。

私も最初はかなり文字が多いかなと思ったが、話しを聞くと全戸配布もするし、希望者にも無料で配布する。そうすると、三島村を出た三島村出身の方も見ることが出来て、感激を受ける声も結構あると聞いている。自分の地元の無形文化遺産に関してそこまで深く調べて、そういうところもあったのだという改めての発見につながると聞いている。

事務局：カレンダーの件だが、まさに本日事務局にも届いて、三島村・鬼界カルデラジオパークというのがカレンダーの表紙にも載っていて、このプロジェクトは5年目くらいになる。今も協議会の運営に関わっている人で、元地域おこし協力隊でもともとは協議会の事務局にいた方が始めている。地域おこし協力隊は3年満期で終わっているが、移住者として島に残られていて、カレンダープロジェクトの委託を受けて続けておりジオパークのカレンダーとして成立している。50部は、全国の希望者に配布していると思う。

委員：カレンダーの制作をしている方は、ジオパークの資料館のガイドもしていた。今はコロナでやっていないが、前にガイドツアーが実施されていた時には資料館の中で案内をしていた。今は主に教育で活用されているそう。

オブザーバー：先程、学校の関係で質問があった件について、私からも補足をする。11 月に文部科学省の中で三島村の教育長が講演する機会があり、そこで発表されていた事の情報提供になる。

先程 80 人の生徒がいるという話しがあったが、ジオパークの中に住んでいる人口がだいたい 380 人で、そのうちの 80 名が小中学生ということになる。本当にそんなに子供がいるのかという話しになるが、これにはカラクリがあって、山村留学という制度を三島村は平成 9 年から 24 年くらい続けている。今年の山村留学で来ているのが、全体で 28 名いらっしゃるという報告を受けている。基本的に地元の子供たちはこの 80 名のうちの 3 割しかいないそう。他は 28 名の留学生と、教員 50 名のその子供たちということなので、三島村には所縁のない方々の子供たちがいるという状況らしい。ただ、山村留学で第二の故郷と思ってくれる人が多くなって、非常に良い影響を与えているという話しが出ていたので、その方達が将来的に三島村のために色々と役に立ってくれたりすると良いのかなと思ったし、離島や山村地域でよくある話しなので参考になればと思う。

委員：教育関係で、文科省のサイトでは三島村の教育体制についての発表資料が載っているので、もし興味があるようでしたら見て欲しい。

事務局：その話題とは別だが、指摘する課題の 3 番にエリアの事を入れているが、エリアについては JGC として四角で良いと認定しているので、JGC の中で整理してからではないと課題として地域に投げるのは無理に感じる。いかがか。今までは海に関しては何も根拠がなく、四角でも一筆書きなら良いというふうに委員会としても言ってきた経緯があるので、それを指摘事項に入れるのは整理してからではないと時期的には早いと思う。ユネスコ世界ジオパークの場合は、カウンシルの中で去年くらいから海域であっても根拠が必要だとなってきているので、何らかの根拠は入れておくべきだとお伝えしているが、日本ジオパーク認定地域については整理が必要だと思うがいかがか。

委員長：姫島も正に同じことなので、取り敢えず今の指摘事項から外していただければと思う。

委員：承知した。

委員長：その他はあるか。

委員：島民としての元専門員と事務局の関わりについてはどんな感じなのか。

委員：今回の審査が延期になって日程が変わった結果、彼と会えなかった。大学の取り組みとして、大学の先生と元専門員が登場してオンラインでちょっとだけ話した。その場もちょうど他の用事が入っていて、15 分しか対応が出来なかった。事務局の雰囲気としては良く分からない。

委員：承知した。九州ジオ連絡会の中では、事務局に彼がメンバーとして入っているし、おそらく事務局の現専門員も結構頻繁に硫黄島には行っていたみたいなので大丈夫だとは思うが、彼がいるからこそ色んな人が集まってくるというのが最初の認定の時からの感覚であるので、今後も積極的な支援をお願いしていただくことになると思う。

委員：確かに観光と教育の関係者と話す時には、彼の名前がかなり出ていた。ジオツーリズムの発展には欠かせない存在だと思う。ツアーの造成や実行だったり、ジオ科の生徒さん達が調べる中で、やっぱり誰かに専門的なことを聞かなければならない時に彼にというところだった。

委員：そういう人に代わる何か専門性を持った人が事務局にいれば尚、活動の厚みが増すのかなというところとか、色んなメディアにも元専門員が出ていて、実際に俳優と山を登ったりとか、NHK の番組で海に潜ったりとかしているので、今後とも彼の存在が非常に重要になると思う。引き続き支援を得られるような形で関わっていただけるようになればと思う。

委員長：ここで議論を閉じたいと思う。今の三島村・鬼界カルデラについて認定したいと思うが、反対の人はいるか。
一同：（意見なし）
委員長：賛成の人は拍手をお願いする。
一同：（拍手）
委員長：三島村・鬼界カルデラを再認定とする。

【議題⑧ 新規認定審査地域審議：十勝岳】
委員長：続きまして議題⑧の十勝岳。
委員：十勝岳は3人で行ってきた。この地域は、2017年に新規認定の申請をして、その際には認定は認められなかった。その際の大きな指摘として、一つは、まずは事務局体制。2 つの町、美瑛町と上富良野町がジオパークの範囲だが、ジオパークの事務局がそれぞれの町の役場に分かれていて一体となって運営していない。それから、部会等の仕組みが立ち上がっていたが、立ち上げたばかりで、まだどう機能するのか見えておらず機能も特にしていなかったというのがあり、その辺が大きな問題となっていた。その他にも色々と問題があって、準備不足だった。

今回、行ってきて、前回より4年経つが、組織はちゃんと一か所で事務局体制が出来ていて、部会もきちんとメンバーが集まりを開いて、一部の部会だが事務局に頼まれているのではなくて、自分達で考えて色んな事業をしている部会があるという段階にきているのが見えてきた。

この地域はもともと美瑛町は観光地だし、上富良野町もラベンダーの有名な農場があって観光地としても有名な所だが、どちらも十勝岳の麓なので「十勝岳」というキーワードでジオパークをやりたいとやっていると言う事になる。

現在の状況だが、ガイドの活動に加えて、十勝岳ジオくらぶというガイドまではしたくないがジオパークについて学びたい、あるいは何かをやりたいという人が集まっている住民の団体があり、それが毎月何かイベントを開いてみんなでジオパークの中を巡ったりなど様々な事をやっている。

ガイド業も非常にプロ志向で、きちんとお金を取ってやりましょうと考え集まってきた人達。上富良野町には自衛隊の駐屯地があり、自衛隊を引退してガイドを，という方も結構いらっしゃるが、畑作をやっている農家で時間が取れる時にガイドをやろうというまだ若い40代から50代の人、それから宿の経営者の方でジオガイドになろうとしている人など現役の世代がガイド活動に加わっている．ガイド活動もこれからではあり，コロナの状況もあって実際にツアーをたくさんやっているわけではないが、非常に期待が持てる状況になっているところだった。

ここで一つ面白かったのは、美瑛町はもともと観光地でオーバーツーリズムの問題がある。美瑛町に来る人は畑を見に来る。農家の人達からすると畑に立ち入ってもらいたくはないけども、色んな観光客がやって来て畑にゴミを捨てたり、立ち入ったりなどの問題も出てきている．そこでジオパークになる前からこの美瑛町の景観をどうやって守るか、しかも農業と両立させてどう観光をやっていくかの議論がなされていた。そういう持続可能なツーリズムをジオパークでやりたいという方針がジオパークとして計画の中に入っているというところが大きな特徴かと思う。

拠点施設の件も前回に色々問題になっていたところではあるが、準備が進んできている。ただ、展示内容には色々問題があり、これから改善していけば良いというふうに思っている。

調査員3人の意見としては、新たなジオパークとして認めるに至る十分な準備が出来てきたのではないかという結論になった。

今後に関してだが、宿の防災情報などは不十分なところがあったり、展示、それから様々なパンフレット

に難しいところがあったりなど、その辺を改善して欲しいというところが問題になってくると思う。

というわけで、3人の結論としては新規認定を認めるということで提案させていただきたい。

委員長：只今の報告について質問、コメント等お願いする。

委員：2 つの町で上手くやっているという話しだったが、この前のプレゼンの話しを聞いていても無理矢理 2 つの町の良い所を見せようというイメージがあった。実際、運営している協議会の中では表だけではなく、全般的にやって行ける方向性が見えてきているという理解で良いか。

委員：その辺は中々難しいところ。ただ、一緒に出来ると思う理由が1つあって、それは民間ベースの動きで、これまでのお土産は美瑛の畑、上富良野のラベンダーでそれぞれやっていたが、ジオパークを作って部会で一緒に協議をすることで十勝岳ブランドの商品がいくつか出て来ている。それは両町の人達が一緒に作って、両町で十勝岳ブランドのお土産を売ろうという動きが出ている。これは実際にジオパークという動きで両町の町の人達が協力してやって行ける新たな事業が出来たという事なので、将来的には伸びるのではないかと期待している。

委員：それを一つ手がかりにして、共同で色々なものを作っていく足掛かりが出来ているという理解で良いか。

委員：実際には、美瑛町の買い物は旭川に行き、上富良野町の買い物は富良野市に行くということで、もともと生活圏はそんなに繋がりはなかった。観光に関わる人の中で、「十勝岳」という1つのブランドでやって行こうという動きになっている。

委員：承知した。

委員長：専門員は結局1人なのか。

委員：その通り。前に室戸にいた専門員がいる。審査の事をよく分かっているので書類の作り方は上手なので、そこはやりやすかった。

委員長：課題にも書いてあるが、波状丘陵はやはり分かりにくいと思うが、これについて伝え方はまだまだなのか。

委員：波状丘陵は色んな所に売ってきたところがあるので、そう簡単に方針転換できないところもあるかもしれないが、あの地形の出来方自体にはまだ色々課題がある。自然景観のように売ってきているが、人間が作った景観という側面があり、そこをもうちょっと言った方が良いのではというところを指摘して帰ってきたところ。

事務局：事務局のこともう少し確認したほうが良いと思う。課題のところにも人員の拡充とジェンダーバランスの改善が必要だということで正にその通りだと思うが、見込みとしてはいかがなのか。

事務局長もしっかり取り組まれているようで、そこに専門員も来てという体制だと思うが、それだけで機能するのかどうかということと、以前は事務局が2ヵ所にバラバラにあったのを1ヵ所にみんなで集まって仕事を出来るようになったとは思うが、その辺りの現状と今後の見込みとしていかがか。

委員：人が増える見込みはそんなにないと思う。現状を少なくとも維持してくれれば結構出来るのではないかと考えている．部会やジオくらぶの住民の人達の動きが書類で見ていたよりは実質的で活発なようなので，そこに期待している。

委員：学術関係者や大学との連携はどんな感じか。例えば何か農業的な取り組みを今後地域振興とかに活かして行く時に、もうちょっと学術的なバッググラウンドがあれば情報を踏まえたストーリーがあったほうが良いと思うが、大学や研究機関との関わりはどうか。

委員：研究機関は火山の連携がある。十勝泥流の跡を客土して復活させたり土が面白い所だが、土の研究者の人はまだ関わっていないので、そこはもう少し明確にリコメンデーションに書いた方が良いのかと、今の質問を受けて思った。

委員：承知した。是非お願いする。

委員：去年の今頃、私も十勝岳に行って見てきた。その時には拠点施設は全くジオパークの情報がなくこれから作るとは言っていたが、その辺り分かりやすい説明が展開されていたか。

もう1点は、去年行った時に観光を担当している地域おこし協力隊で雇用されている方が、ご本人が持っている観光の部分より事務作業に追われていて、中々観光に取り組めないと言っていたことがあったので、その辺は改善されているのか。また、彼の地域おこし協力隊の任期切れみたいな話しもあったのか。もしあったら教えて欲しい。

委員：地域おこし協力隊の方の件からいくと、先の見通しは特にないのではないかと思う。なにしろ、申請書を出して申請の準備をやっていたので、やはり本領を発揮出来ていないというところも今まであったとは思う。これからどうなるかはちょっと分からない。

拠点施設の展示は報告書には書いたが、3ヵ所のストーリーのそれぞれの要素で方針ははっきりしている。1番目になる国交省の砂防の展示施設の展示はこれから。ただ、各地域に共通のジオパークの解説パネルが十数枚ずつ配布されていて、それは非常に真面目できちんとしているが、真面目すぎてつまらないというところが問題。なので、展示はきちんとある。ただ、あれだとちょっと固いかなという状態。

委員：去年行った時、非常に真面目に頑張りすぎて動けないように思うところもあったので、その辺を崩してあげたいような気もした。

委員：事務局長と専門員のキャラクターがかなり反映されているので、基本的にすごく真面目。一方、十勝岳ジオくらぶのガイドの人達は色んな人材がいてこれから期待できる。

委員：承知した。

委員長：追加質問がなければ判断をしたいと思う。

委員：先程の説明の中に、ジオガイドになるのではないけれど皆さん活発な活動があると言っているその団体は、正式なパートナーシップのもとに推進協議会と動いているのかどうかと、その若い世代と言うのはどれくらい若いのかどうかも教えて欲しい。

委員：ジオガイドくらぶの位置付けは、ちゃんと協議会の支援を受けているが、パートナーシップみたいな関係にはないと思う。若い人というのは 40 代 50 代。本当の若い人ではなくて、高齢者ではないという意味。

委員：承知した。

委員：それでは十勝岳について新規認定という方向でいきたいと思うが、反対の方はいるか。

一同：(意見なし)

委員長：賛成の方は拍手をお願いする。

一同：(拍手)

委員長：十勝岳を新規認定とする。

【議題⑨ 新規認定審査地域審議：五島列島】

委員長：次は新規認定の五島列島だが、これは調査に行った3人ともいるので、私が報告し、お二人から追加コメントをいただくということにしたいと思う。

背景を言っておくと、2019年に申請が1回出された。その時は、審査の結果、認定せずということになった。その時に出した課題が一覧表に書いてある。

審査は11月19日から22日まで私と、委員2名の計3名で伺った。それから12月2日にオンラインで追加の調査を行った。初回の申請で出された指摘事項があげてあるが、理念の理解や目的目標の共有ということで、これはそれなりに進んだ。

2つ目の基本計画の具体化、アクションプランの策定は、すでにあった基本計画を作り直して、アクションプランも作り直した。

ジオサイトの整理は、地質のサイトばかりが多く文化サイトがよく見えないということがあった。それについては文化サイトを追加する。それから海底の遺跡についても追加した。

その時に誤解があり、ジオサイトの共通しているものが散らばっていても、1 つのサイトにしているという問題があったので、これは修正させた。

奈留島の水晶岳の双子水晶(日本武双水晶)、これについては盗掘されていてネットで販売されていたりするが、それがジオサイトに指定されていなかったものを今回サイトとして指定した。それをどう保護するかは、まだ向こうで議論されていて私達はアドバイスをしてきた。

パンフレット、案内看板等の可視性の向上については、それなりに進んでいる。

ジオガイドの養成講座の充実というところで、これは講座を開いて認定制度を導入した。その結果、27 名のジオガイドが生まれたが、このコロナ禍で実践出来ていないということで、そのスキルについてはまだまだ問題がある。

ジオパークの拠点に関わるコンテンツの検討については、南の方に鐙瀬という海岸があって、そこのビジターセンターを改装してジオパークの拠点とすることになっているが、その進捗状況について我々が確認してきた。青写真が出来ていて、予算化もされており、展示される内容も決まってきている。

学校教育へのジオパーク学習の導入については、それなりに進んでいるが、全体が体系だったものにはまだ至っていない。

ジオパーク構想の境界線の検討は、前回は国立公園の境界、すなわち海岸から 1km という所で境界線を引いていたが、漁業等の生活の絡み等を考えて、水深 100m ないし 120m という所で全部境界線を引き直している。

それからジオパーク構想について、五島列島と言いながらも下五島地域だけのジオパーク構想になっているので、それをどうやって五島列島全体に広げていくのかという事に関する検討だが、これは正直進んでいない。逆に後退しているようなところも見えた。

結論だけ先に言うと、不十分のため出来たら保留にしたいが、保留にするには年内に解決できるような課題を出さなければならないというので、その課題次第で保留あるいは認定ということにしている。

他は 2 人に説明していただこうと思う。

良いところは一覧表に書いてあるが、SNS で色んな情報発信をしていて、YouTube の中に「Goto!ジオの声」という動画や、ジオパークの紹介動画が数多く公開されている。それから五島市の広報ごとうの中に「Goto!ジオ通信」というのがあって、イベント紹介と同時に市民で参加している人達の紹介がある。こういう事を経てかなり認知度が上がっているように思う。

基本計画とアクションプランを見直したわけだが、特に推進母体である五島市の第Ⅱ期総合戦略の中にジオパーク推進事業が明記されて、きちんと予算化されているというところが評価される。その中に、鐙瀬のビジターセンターの改修費用もきちんと積算されている。

岐宿、富江などの地域は五島の火山地域だが、そういう所では地域の団体が非常に積極的にジオパーク活動に絡んできているのが見られる。

学習面では、ふるさと学習の中でジオパークの理解が非常に進んでいるということで、生徒達がジオフォトコンテストに入賞したり、ジオフードを発案して地域の人にそれを売り込んだり、T シャツのデザインを考えたり、そういうところが見られる。

課題は名称についてだが、これは今のままではおそらく上五島地域がその名称を使うことに賛成するようにあまり見えないので、その事についてきちんと青写真を示して欲しいという形にした。この背景は、実は世界遺産を目指している時に、同時に一緒にジオパークをやろうと上五島と下五島が一緒に走り始めた。その時に五島列島という名称を使うことに決めたが、2018 年 6 月に世界遺産に認定されてから上五島が手を引

き始めた。今まではオブザーバーで協議会に参加していたが、2 月にオブザーバーにならないということになった。これは上五島の町長が変わったということも大きく影響していると思う。これに関してはこの報告書を作り上げる中で、地元にどういう方針かというのを問いただして、それについての回答を添付書類として示している。事務局にも地元に当たっていただいて、地元としてどういう方針でいくのかというのを確認する作業をしている。

結果的に今日は保留になるかもしれないということを保留にしておいて、次回、次々回までに地元の対応をよく見て判断しようと思っている。

可視性の面では、やはり問題があり HP であまり紹介されていない。文化サイト、特に世界遺産を含めてあまりジオパークがあるように紹介されていない。

それから 3 つ目の水晶岳の保全について。これは地域で何回か繰り返して議論されているが、水晶岳を外したジオルートを作ろうとか、少し後ろ向き。それよりもこのジオサイトは非常に貴重であって、盗掘でこれだけ荒れているよというのをきちんと見せた方がいいというアドバイスをした。ガイド付きのみアクセス出来るようにしたらどうかという事を伝えている。

それから地質の専門員は 2 名いるが、その他ビジターセンターには動植物の専門員がいたりするが、そういう方達と情報共有をきちんと出来ていない。特にジオガイドとの情報共有があまり上手く伝わっていない、役に立っていないというところが問題だと思う。

他にも幾つかあるが、ガイドについては経験不足ということもあるし、それから変に「大陸とのかけ橋」というのを前面に出していて、それに無理矢理つなげたガイドをしようとしている苦しい状況が見られた。これについても今後経験を積んで改善していく必要があると思う。

その他、無形文化遺産についても、きちんとした形でジオパークとして知識をどう残していくのか、そういう視点が欲しい。

また、ジェンダーバランスが指摘の通りなされていないので見直して欲しい。

以上が概略だが、足りないところをお二人から順番にお願いする。

委員：今回は 2 年前の認定見送りから色々な活動が着実に進んでいると思う。特に専門員 2 名が昨年から配置されたということで、出前授業などそういうものも進んだし、地域に出て行ってジオパークが見えるようになったということで、地域での活動がかなり活発になってきていると思う。

ジオガイドが所属しているカフェが出来て、そういった所でジオパークを紹介するコーナーが出来たり、ジオパークに関わるようなスイーツを作ったり、かなり活動は広がったと思う。

保留にするかもしれないということで、その問題はどうしても皆さんに検討していただきたいが、今の状態は少なくても五島列島のジオパークというふうに呼べるような　状態ではない。

少し地域の方や市長と話しをして気になったのだが、地域の振興として、ジオパークは島全体の事でやっていて、世界遺産は構成資産がある奈留島と久賀島という所だという話しがあって、ちょっと乖離して考えているところもあるのかなということを感じた。世界遺産の構成資産もある地域でも、きちんとジオパークとパートナーシップを持ってやっているということが見える形にして欲しい、というのをしっかり指摘すべきだと感じている。ただ、事務局の中に世界遺産と兼任の職員もおり、意思の疎通が地域でとれれば済むのではないかと感じている。

委員：他のジオパークでは見られないような若い人達がたくさんジオパークに関心を持って積極的に自発的なアクションを起こしているところがけっこう見られたのではないかと思う。

先ほどの報告でもあったカフェの運営や、他の仕事をやりながらジオガイドの認定を受けて、今は新米ガイドとして事務局と一緒に解説を分かりやすく出来るようにツールを作り、審査員の案内を頑張っているところを見て、正直なところ少しうらやましかった。

後はアクションプランがかなりしっかりしているほうではないかと思っていて、出された課題だけではなく全体的なジオパークの運営に関するアクションプランを短期と長期で目指す姿を決定して、それに繋がる年毎のアクションを策定していることを見て、今後このジオパークは何年かけて何をするかを決めているので、割と安定している姿を見せられたかなと思っている。

ただ、先程の報告にもあったように、エリアの問題があり、それに意識しているが、関係者の間でバラつきがあるかと思う。事務局の認識と市長の認識、関係者がその事について考えていないというのがあるので、この名前でいくのならばしっかりエリアの事について意識をしたほうがいいのではないかと個人的に思う。

委員長：質問、コメントをお願いする。

委員：感想なので間違っているかもしれないが、このエリアはジオサイトとしてたくさんの面白い所があるし、歴史的に良いものもいっぱいあるが、そもそも五島列島のジオパークの位置付けのストーリー感が私としてはなかなか見えにくい。例えば日本の西側にあってとか、大陸との関係などをしっかり表現されて、それに基づいて色んなサイトの説明がされているのか。

委員長：実はその事についても不十分なところがあり、研究自身があまり進んでいない。ただ、九大の清川さんのモデルがあり、五島層群が非常に分厚く内陸性の堆積物がある。一方では日本海が開いているが、その動きとシーズしたダイナミックな関係というのはあまり説明されていない。ただ、その五島層群が溜まった後に 2 回の時期に分けて断裂系が発達するのと、火性活動もその間に入ってくる。そういう中で、こういう入江がいっぱい発達したのを活用して、世界遺産になった隠れキリシタンの場所が出来てきたというだいたいのストーリーは出来ている。ただ、地球科学的なバックグラウンドのところは少し分かりにくいし、もっと研究の対象になるではないかという印象で見ている。

そういうところを持ってずっと大陸と地学的にもつながっているので、それと遣唐使や倭寇、そういう歴史的なつながりというのもオーバーラップさせながら見せているというところで、テーマ的には大陸とのつながりということになっている。

委員：承知した。そこら辺が面白いエリアがいっぱいあるだけに惜しいなというのが正直な感想。

委員長：九州大学のテリトリーだったが、あまりスキームが進んでいない。

委員：復習みたいな質問で申し訳ないが、今あがっている調査報告に載っている事は五島列島の中の五島市だけの部分であり、それは福江島を始め色んな島全体ということでよろしいか。

委員長：五島市というのは福江島、奈留島、久賀島を含む部分。地質の見どころはひっくるめて言っているが、もちろん下五島でも今話した事は全部見られる。

委員：良い話しがいっぱいあるので是非新しい仲間に入っていただけたらと思う一方で、新しい名称が何でそのエリアがどうだというのが大きな問題だと感じた。

委員：前回見送りになって、2 年頑張っただけの前進はあったという事を聞いたので、私の意見としては名称の問題はさておき、下五島の範囲でまずは認定をしてさらに磨きをかけていただいて、上五島との連携の道を模索して行くというふうになればいいなと思う。とは言え、上五島の小値賀町、新上五島町、佐世保市にまたがると思うが、そこにエリアを広げて再挑戦となると時間的に先になってしまうので、ひとまず下五島の範囲で認定をするというのが現実的ではないか。ただ、名称の上手い工夫をした上で、上五島の市町村の人達からも異論が出ない様な形にした方がよいと思った。

委員長：まさにそういう解決策を模索してもらっているところ。

委員：五島に関しては前回の審査で見送りになった後の 2 年間、飛躍的に進歩したと思っている。本当にすごい進歩。ジオパークの審査の中では、運営体制や人員の確保のところが大きな問題になるが、五島列島の場合は事務局体制やスタッフが非常に良い雰囲気で仕事をしているイメージがある。認定されてもこれはきっと維持できるのではないかという漠然とした感覚を持っている。

ただ、絶対名称の問題は解決して欲しいというのもあるし、ガイドさんと専門員の連携の部分については、協議会の地質の専門員 2 名とガイドさんは多分上手くいっているが、ビジターセンターのほうがあまり関わってくれていない、という課題もある。現存の地域の有識者とガイドさんについては、有識者の持っている情報がガイドさんに上手く流れるような仕組みを作っていくと、幅の広いガイドが出来るのではないか。やはりまだ地質に関わる説明に偏りがあるので、せっかく九大の環境の先生や生態系の専門の先生もずっと入っているし、地域でずっとジオパークをやって行こうと立ち上げた方が非常に歴史や地域に関して詳しいので、その人がある意味ブレインになって地形地質以外の部分の情報をガイドさんの中に広めていくことは出来ると思うので、名称を上手く解決していただいて早く仲間になって欲しいというのは正直ある。

委員長：まさにその通り。事務局員の中にビジターセンターの人も入っている。ただ、上手く業務の分担と情報共有が出来ていないところが課題。もちろん非常に積極的に色んな展開をされているので、そういうのを上手く使えるようになれば、これからどんどん発展していくと思う。

事務局から、事務局的にどういう事が展開されているか紹介をお願いする。いずれにしても今日はここで判断をしないという形になるとは思う。

事務局：先週、五島列島の事務局長と今こちらで懸念している名称、エリアの問題についてお話しをした。最終的にはエリアを拡大して五島列島全体になることを前提としていくための方向と、まずは南の方だけ認定しておいて限定的な名称にするという方向と、2 つについて内部と相手方の上五島の新上五島町との調整をしているところ。1 月 28 日の委員会最終日までには何らかの回答をいただけるということで、準備を進めていただいている。

拡大の前提としてというところで言えば、拡大される自治体から拡大に同意するとか、そう言う方向で自分達もこれから活動に加わるのだと言うような何らかの担保になるものが必要だと考える。そういったところについて、そこまで言えるかどうかの調整に入っていると現地は言っている。

ただ、オブザーバーから外れたということはこれまでの審査の中でも後退しているように見える部分なので、その部分が補えるような前向きな何らかのものが出てくれば「五島列島」という名称での認定もあると思うし、それがかなり厳しい状況であれば、名称を限定的にして認定するという方法もあると思う。

いずれにしても、1 月 28 日の委員会までに何らかの結果が出るとのこと。

委員長：過去には南アルプスジオパークの場合に、「南アルプス（中央構造線エリア）」という具合に認定してきたこともある。そういう経緯もあるので無理に保留にするのではなく、詰めるところまで詰めて、最終判断を 3 回目の委員会でしたいと思う。

そういう判断を委員長としてしたいと思うが、これについて意見のある方はいるか。

一同：（意見なし）

委員長：特に異論はないので、3 回目の委員会でここをもう 1 回議論するということにしたいと思う。内容については今日報告したということにしたいと思う。

【記者発表資料作成】

※プレスリリース資料の文面を確認